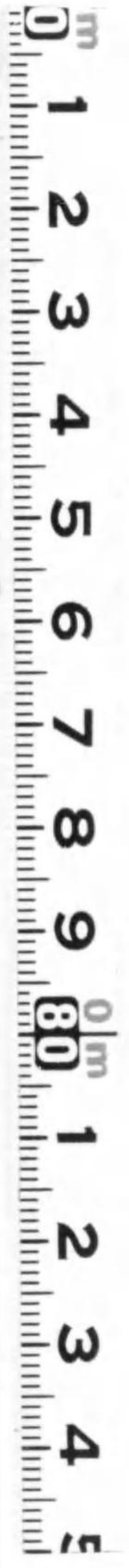


339
306



始



特234
18

田中健三著

國文法概說

附問題解說

立命館出版部



緒言

最近三年間入試問題の統計

| 問題種別 | 年度 | | | 計 |
|-----------|-------|------|------|----|
| | 昭和四年度 | 同五年度 | 同六年度 | |
| 活用言に関する問題 | 一〇 | 一〇 | 一四 | 三四 |
| 同連続に関する問題 | 〇 | 一 | 三 | 四 |
| 正誤に関する問題 | 四 | 五 | 五 | 一四 |
| 品詞に関する問題 | 四 | 七 | 八 | 一九 |
| 文章法に関する問題 | 四 | 七 | 三 | 一四 |
| その他の問題 | 〇 | 〇 | 四 | 四 |
| 計 | 二二 | 三〇 | 三七 | 八九 |

右の表で説明してゐる通り、活用言とその連続に關した問題は、一番優勢である。それ故に活用言をはじめに説明することにした。次は正誤、品詞、文章法と一と通り、簡単に説明し練習の要あるものは、演習題を提供して置いた。その演習題に入試問題を利用し、前篇と後篇との聯絡を圖つた。それには丙三(三)等記號を附けてあるから、目次に引合せて頁數を見、そのところを繕いて、調べられたら。

昭和六年九月

著者しるす。

目次

前篇 國文法概説

第一篇 活用言……………一

第一章 動詞……………三

一 正格活用(文語)……………四

二 變格活用(文語)……………七

三 活用形(文語)……………二一

四 自動詞他動詞……………一九

五 文語動詞活用の深究……………三三

六 口語の動詞……………三五

第二章 形容詞……………三三

第三章 形容動詞……………四三

第四章 助動詞

一 受身の助動詞……………四

二 使役の助動詞……………五

三 敬語の助動詞……………五

四 打消の助動詞……………六

五 時の助動詞……………六

六 希望の助動詞……………六

七 推量の助動詞……………六

八 詠歎の助動詞……………六

九 指定の助動詞……………六

一〇 比況の助動詞……………七

第二篇 活用言の連続

第一章 連続系統……………七

第二章 連続演習……………七

第三章 連続の特例……………八

一 未然形系統に属する特例……………八

二 連用形系統に属する特例……………八

三 終止形系統に属する破格……………八

第三篇 正誤……………九

第一章 假名の誤をしないこと……………九

第二章 音便の書方を誤るな……………九

第三章 活用を誤るな……………一〇

第四章 呼應……………一〇

第五章 語の連続その一……………一〇

文法上の許容事項表……………一〇

第六章 語の連続その二……………一〇

助詞(第一類)の表……………一〇

助詞(第二類)の表……………一三

助詞(第三類)の表……………一四

第四篇 品詞……………一三

第一章 品詞の名稱……………一三

第二章 名詞 代名詞……………一三

第三章 副詞 接續詞 感動詞……………一七

第四章 助詞……………一九

一 第一類の助詞……………一四

二 第二類の助詞……………一五

三 第三類の助詞……………一五

第五篇 文章法……………一五

第一章 主語 述語……………一五

第二章 修飾語……………一七

第三章 客語 補語……………一六

第四章 句の種類……………一六

第五章 節……………一七

第六章 文の構成上の種類……………一七

第七章 文の成分……………一七

第八章 成分の省略と倒置……………一八

第九章 文の性質上の分類……………一八

附録一 同音異義の語……………一八

附録二 接續語接尾語……………一八

後篇 問題解説

甲 昭和六年度入試問題の解説……………二〇

一 東京高師……………二〇

| | |
|-----------|------|
| 二 同 上 | 1101 |
| 三 廣島高師 | 1101 |
| 四 東京女高師 | 1103 |
| 五 同 上 | 1104 |
| 六 奈良女高師 | 1104 |
| 七 同 上 | 1106 |
| 八 山形高校 | 1106 |
| 九 富山高校 | 1107 |
| 一〇 東京高校 | 1108 |
| 一一 同 上 | 1108 |
| 一二 同 上 | 1109 |
| 一三 府立東京高校 | 1111 |
| 一四 静岡高校 | 1111 |
| 一五 三 高 | 1113 |

| | |
|------------|------|
| 一六 同 上 | 1114 |
| 一七 浪速高校 | 1115 |
| 一八 六 高 | 1115 |
| 一九 七 高 | 1116 |
| 二〇 同 上 | 1116 |
| 二一 松山高校 | 1110 |
| 二二 高知高校 | 1110 |
| 二三 同 上 | 1110 |
| 二四 山口高校 | 1111 |
| 二五 福岡高校 | 1111 |
| 二六 臺北高校 | 1111 |
| 二七 東京商大專門部 | 1113 |
| 二八 海 軍 | 1114 |
| 二九 同 上 | 1114 |

三〇 大東文化高等科……………三二四

三一 東京帝大農學部……………三二五

三二 東京女大……………三二六

三三 福岡女專……………三二七

三四 京都女專……………三二八

乙 昭和三・四・五年度入試問題類別の解説……………三三三

一 品詞の解剖其他に關する問題……………三三三

(一) 昭五 松江高校……………三三三

(二) 同 松山高校……………三三三

(三) 同 高知高校……………三三三

(四) 同 奈良女高師……………三三四

(五) 同 神宮皇學館……………三三五

(六) 同 金澤高工……………三三五

乙二 (七) 昭四 松本高校……………三三七

(八) 同 福岡女專……………三三七

(九) 同 同……………三三八

(一〇) 同三 東京女高師……………三三八

(一一) 同 奈良女高師……………三三九

(一二) 同 高校入學資格試験……………三四〇

(一三) 同 三 高……………三四一

(一四) 同 七 高……………三四二

(一五) 同 水戸高校……………三四三

(一六) 同 松本高校……………三四三

乙二 活用に關する問題……………三四三

(一) 昭五 三 高……………三四三

(二) 同 六 高……………三四四

(三) 同 東京府立高校……………三四五

乙二 (四) 昭五 浦和高校.....二四六
 (五) 同 静岡高校.....二四七
 (六) 同 福岡高校.....二四八
 (七) 同 京城帝大豫科.....二四九
 (八) 同 小樽高商.....二五〇
 (九) 同 台北高商.....二五〇
 (一〇) 同 東京高師.....二五一
 (一一) 同 廣島高師.....二五二
 (一二) 同 東京女高師.....二五三
 (一三) 同 静岡高校.....二五三
 (一四) 同 東京高師.....二五四
 (一五) 同 東京女高師.....二五五
 (一六) 同 小樽高商.....二五六
 (一七) 同 三 高.....二五七

乙二 (一八) 昭四 山口高校.....二五七
 (一九) 同 高知高校.....二五八
 (二〇) 同 同.....二五九
 (二一) 同 京都府立醫大豫科.....二六〇
 (二二) 同 六 高.....二六一
 (二三) 同 三 東京高師.....二六一
 (二四) 同 高校入學資格試験.....二六二
 (二五) 同 一 高.....二六三
 (二六) 同 三 高.....二六四
 (二七) 同 福岡高校.....二六四

乙三 正誤に關する問題.....二六五

(一) 昭五 二 高.....二六五
 (二) 同 三 高.....二六六
 (三) 同 東京高校.....二六七

- (四) 昭三 松本高校.....二七
- (五) 同 姫路高校.....二七
- (六) 同五 高知高校.....二六
- (七) 同 東京商大豫科.....二六
- (八) 同 金澤高工.....二九
- (九) 同 國學院大學豫科.....二七〇
- (一〇) 同 京城帝大豫科.....二七〇
- (一一) 同 京都府立醫大豫科.....二七一
- (一二) 同 東京高師.....二七一
- (一三) 同 廣島高師.....二七三
- (一四) 同四 東京高校.....二七三
- (一五) 同 東京高師.....二七三
- (一六) 同 海軍.....二七三
- (一七) 同 三高.....二七四

乙三

- (一八) 同三 廣島高師.....二七四
- (一九) 同 東京女高師.....二七五
- (二〇) 同 高校入學資格試験.....二七五
- (二一) 同 神宮皇學館.....二七六

乙四

- 文章法に關する問題.....二七六
- (一) 昭五 二高.....二七六
- (二) 同 七高.....二七七
- (三) 同 東京高校.....二七七
- (四) 同 山口高校.....二七七
- (五) 同 東京女高師.....二七六
- (六) 同四 同.....二七六
- (七) 同 松本高校.....二七九
- (八) 同 福岡女專.....二七九
- (九) 同三 東京高師.....二八〇

乙四 (一〇) 昭三 廣島高師…………… 二八一
 (一一) 同 山口高校…………… 二八一
 (一二) 同 水戸高校…………… 二八三
 (一三) 同 松本高校…………… 二八三

丙 昭和二年度以前の問題類別の解説…………… 二八四

一 總演習…………… 二八四

(一) 大正二 陸軍…………… 二八四
 (二) 同 四 專檢…………… 二八五
 (三) 同 九 東京高師…………… 二八六
 (四) 昭二 神戸高商…………… 二八六
 (五) 大正八 同…………… 二八七
 (六) 同 二 東京高師…………… 二八七
 (七) 同 十一 同…………… 二八八

丙一 (八) 昭二 東京商大豫科…………… 二八九

(九) 大正八 專檢…………… 二九〇
 (一〇) 同 元女高師其他…………… 二九一
 (一一) ……………… 二九五
 (一二) 同 十 東京高師…………… 二九五
 (一三) 同 十一 女高師…………… 二九六
 (一四) 同 七 專檢…………… 二九七
 (一五) 同 女高師…………… 二九八
 (一六) 同 二 東京高師…………… 三〇一
 (一七) 同 陸士…………… 三〇三
 (一八) 同 九 東京高師…………… 三〇三
 (一九) 同 八 東京高師…………… 三〇四
 (二〇) 明治三九 高師…………… 三〇五
 (二一) 大正元 東京高師…………… 三〇六

丙一 (三) 大正十二 同.....三〇六

(三) 同 廣島 高師.....三〇七

(四) 昭 二 小樽 高商.....三〇七

(五) 大正十三 廣島 高師.....三〇八

(六) 明治四一 女 高 師.....三〇九

(七) 同 四二 東京 高師.....三一〇

(八) 同 四十 同.....三一

(九) 大正十四 東京商大豫科.....三二

(一〇) 昭 二 神宮皇學館.....三三

(一一) 大正七 東京女高師.....三三

(一二) 明治三九 同.....三四

(一三) 大正二 東京高師其他.....三五

(一四)三八

二 品詞の解剖.....

丙二 (一) 大正元 女 高 師.....三九

(二) 同 東北農大.....三九

(三) 大正十二 東京 高師.....三九

(四) 昭 二 東京女高師.....四〇

(五) 大正八 同.....四〇

(六) 同 十五 同.....四〇

(七) 同 元各 高 校.....四一

(八) 同 二女 高 師.....四一

(九) 同 七 陸 士.....四一

(一〇) 同 十 東京 高師.....四二

(一一) 同 十四 同.....四二

(一二) 同 廣島 高師.....四三

(一三) 昭 二 東京 高師.....四三

丙三 文章の解剖.....四四

丙三 (一) 大正元女高師……………三四
 (二) 同 二同……………三四
 (三) 同 三東京高師……………三四
 (四) 同 二專 檢……………三五
 (五) 同 十一女高師……………三六
 (六) 同 九同……………三六
 (七) 昭 二東京商大専門部……………三六
 (八) ………………三七
 (九) 大正十五 廣島高師……………三七
 (一〇) 昭 二廣島高師……………三八
 丙四 正誤に關する問題……………三九
 (一) 大正元 高 師……………三九
 (二) 同 陸 士……………三九
 (三) 同 二高 師……………三九

丙四 (四) 同 陸 經……………三九
 (五) 同 三長崎高商……………三九
 (六) 同 七陸 士……………三九
 (七) 同 海 軍 兵……………三九
 (八) 同 廣島高師……………三九
 (九) 同 上田蠶糸専門……………三九
 (一〇) 同 八陸 士……………三九
 (一一) 同 東京高師……………三九
 (一二) 同 專 檢……………三九
 (一三) 同 水 産 講……………三九
 (一四) 同 專 檢……………三九
 (一五) 同 九上田蠶專……………三九
 (一六) 同 東京高師……………三九
 (一七) 同 外 語……………三九

丙四 (一八) 大正十東京高師……………三五一
 (一九) 同 廣島高師……………三四三
 (二〇) 同 十一東京高師……………三四三
 (二一) 同 十二商大豫科……………三四三
 (二二) 同 陸士……………三四三
 (二三) 同 女高師……………三四四
 (二四) 同 早稻田高……………三四五
 (二五) 同 十三東京高師……………三四五
 (二六) 同 商大豫科……………三四六
 (二七) 同 十四東京高師……………三四六
 (二八) 同 東京女高師……………三四七
 (二九) 同 東商大豫科……………三四九
 (三〇) 同 十五東京高師……………三四九
 (三一) 同 廣島高師……………三五〇

(三二) 同 東商大豫……………三五二
 (三三) 昭 二廣島高師……………三五三

前篇 國文法概說

前編 國文法 第一編

第一篇 活用言

第一章 動詞



鳥飛ぶ
花咲く
書を讀む

茲に人あり

一 右の「飛ぶ」、「咲く」、「讀む」、「あり」は事物の動作又は存在をあらはす語で之を動詞といふ。

- (一) 書を讀まん
- (二) 書を讀みたり
- (三) 書を讀む
- (四) 書を讀め

二 右の例のやうに「読む」といふ動詞はマミムメと語の末が變る。之を動詞の活用といふ。動詞の活用に種類がある。これで動詞を分類して研究するのである。

一 正格活用(文語)

- (一) 咲かきくけ
 - (二) 押さしすせ
 - (三) 分たちつて
 - (四) 習はひふへ
 - (五) 讀まみむめ
 - (六) 去らりるれ
- 三 右のやうに五十音圖の四段に活用するのを四段活用と云ひ、活用の行によつてカ行サ行などいふ。四段活用の動詞はア行ナ行ヤ行ワ行には無い。
- (一) 射いいるいれ
 - (二) 着ききるきれ

- (三) 煮ににるにれ
- (四) 干ひひるひれ
- (五) 見みみるみれ
- (六) 居るゐるゐれ

四 右はイ列の一段に「る」「れ」の添つたもので上一段活用といふ。

蹴 け ける けれ

五 右はエ列の「け」に「る」「れ」の添つたもので下一段活用といふ。この活用には「蹴る」の一語だけである。

「蹴る」は或地方では

蹴 けら けり ける けれ

といふ。かうすれば四段活用になる。上一段活用も

射 いら いら いる いれ

とすると四段活用になる。そこで一段活用はラ行四段の「ラ」「リ」が落ちた活用であるとも考へられる。

次ノ動詞ノ活用ヲ示セ

似る 持つ 渡る 率ゐる 取る

(一) 生^いきくくるくれ

(二) 落^おちつつるつれ

(三) 強^しひふふるふれ

(四) 恨^{うら}みむむるむれ

(五) 報^ういゆゆるゆれ

(六) 懲^{おこ}りるるるれ

六 右はイ列ウ列の二段に活用し、「る」「れ」の添つたもので上二段活用といふ。この活用はア行ナ行ワ行とサ行(清音だけ)は行はある。()に於て無^く。

(一) 得^ええううるうれ

(二) 受^うけくくるくれ

(三) 寄^よせすするすれ

(四) 隔^へてつつるつれ

- (五) 兼^かねぬぬるぬれ
- (六) 教^{おし}へふふるふれ
- (七) 譽^ほめむむるむれ
- (八) 覺^{おぼ}えゆゆるゆれ
- (九) 觸^ふれるるるれ
- (十) 植^うえううるうれ

七 右はエ列ウ列の二段に活用し「る」「れ」の添つたもので下二段活用といふ。この活用は五十音圖のすべての行に互つてゐる。又この活用に屬する動詞は數に於て、四段活用に次いで多い。

右の五種類を正格活用といふ。

次ノ動詞ノ活用ヲ示シ其種類ヲ書ケ

恥^はづ 願^{ねが}ふ 占^しむ 起^おく 見^みゆ

二 變格活用(文語)

八 來^キん春を待てば春は來^キて人は來^{ベシ}とも思はれず又來^ル時もあらんかと秋來^{レバ}れば待たるゝな
り。

來といふ一語は右のやうに活用する。即ち

來こきくくるくれ

之をカ行變格活用といふ。上二段にくらべて一段多く三段となつてゐる。

(一) 食事をせんとす

(二) 食事をして外出す

(三) 休暇には旅行をす

(四) 登山する人は誰々か

(五) 運動すれば健康になる

九 右のやうに 爲^スは

爲せしすするすれ

と活用する。之をサ行變格活用といふ。下二段にくらべて一段多く三段になつてゐる。「す」は「旅す」「説明す」等熟語となる。又「感ず」「論ず」「生ず」等「す」を濁ることもある。

(一) 君の爲國の爲に死なん

(二) 彼は仁を爲^ナして死にたり

(三) 鳥も死に獸も死ぬ

(四) 死ぬる命は惜からず

(五) 死ぬれば萬事休す

(六) 死ぬべき時に死ぬ

十 右のやうにナ行四段に活用はするが、「る」「れ」の添つてゐるところは四段とちがふ。之をナ行變格活用といふ。「死ぬ」「往^キぬ」の二語がこの活用である。助動詞でこの活用をするのがあるから、よく記憶して置くがよい。

(一) 今苦勞して置かば末はよき事もあらん

(二) 果してよき事ありたり

(三) 積善の家に餘慶あり

(四) 陰德ある者は陽報を受く

(五) 苦あれば樂あり

の役をすることがある。之を動詞の名詞性といふ。

十八 動詞用法の第三は前提性である。次に例で示す。

苦あれば樂あり

右の「あれ」は上の苦に對しては敘述性で、下の「樂あり」に對しては「ば」といふ語を伴つて前提性用法をなしてゐる。

十九 一つの語で三つも四つも仕事をするのには、能率を高めねばならぬ。この職能に基いて活用といふものができたのである。これまでの文法はとかく機械的で原理を説かないから、頭のある學生に馬鹿にされる。活用語は入試問題の大部分を占めてゐる以上は、是非この原理を説いて置かねばならぬ。

二十 動詞が單獨でこの役目をするのと、他の語の助によつてそれ等と共にするのと二つの場合に分れる。他の語とは他の動詞や形容詞又は助動詞・助詞である。

(一) 花 咲く 終止形 (三活)

(二) 花よ 咲け 命令形 (六活)

(三) 咲く花に 蝶舞ふ 連體形 (四活)

(四) 咲きほこる花も一時なり 連用形 (二活)

(五) 花咲かば告げん 未然形 (一活)

(六) 花咲けば散る憂あり 已然形 (五活)

二十一 單獨に敘述性を果す動詞に二つの形がある。(一)は通常の敘述で終止するから終止形といふ。(二)は命令請願の敘述で命令形といふ。この二つは相對的のものである。(三)は形容性用法で、分詞のことである。國文法では連體形といふ。體とは體言のことで名詞・代名詞を合せて體言といふ。(四)は下の動詞に結びついたので連用形といふ。用とは用言のことで、活用言をいふと説く學者と、助動詞を除いた活用言をいふと定めたのと二説ある。とにかく動詞形容詞につゞく形である。

『註 助動詞には連用形の外の形からもつゞくから、用言は動詞形容詞形容動詞に限つた方がよい。』
以上の二つは相對したものである。(三)は動詞の形容性以外に次のやうに名詞性用法もある。

言ふ(こと)は 易くして行ふ(こと)は難きものなり。

(四)の用法は下に來た語の用法できまる。こゝは形容性であるが、前提性・敘述性・名詞性は一に下の語次第である。

二十二 (五)と(六)とも相對したもので、前提性に意味のちがひがある。(五)は事柄のまだ定

まらない意味で、未然形といひ、(六)は已に定まつた意味でこの例では一般的に言ひなしたので已然形といふ。未定・既定の意味のちがひは「ば」に關係しない。動詞の活用形にある。未然であるからこそ、未來の助動詞「ん」や打消の「ず」がつくのである。

二十三 動詞は敘述・形容・前提・名詞等の職能をよりよく果たす爲に語尾を變化さす。之を活用といひ、各活用に意義と用法とが定まつてゐて一定の形をもつてゐる。その形を活用形といひ、第一活用から第六活用までである。

| | | | | | | |
|------------|----------------|-----------------|------------------|------------------|-------------------|----------------|
| 未熟の中は下につける | ん・ず・ば | たり・て | とも | 人・か | ども・ば | 命活 |
| 活用形 | (一) 未然活 | (二) 連用活 | (三) 終止活 | (四) 連體活 | (五) 已然活 | (六) 命令活 |
| 打 | つ | ウタ _ン | ウツ _{トモ} | ウツ _カ | ウテ _{ども} | ウテ |
| 來 | コ _ン | キ _{ヨリ} | ク _{トモ} | クル _カ | クレ _{ども} | コ(ヨ) |
| 死 | ぬ | シ _{ニナ} | シ _{ヌトモ} | シ _{ヌルカ} | シ _{ヌレども} | シ _ネ |

左ノ語ノ活用表ヲ作レ (昭六東京高校)

(イ)老ゆ (ニ)似る (ハ)爲 (甲(10)に解答がある)

二十四 未然形とは右の表に示した通り、「ず」「ん」につゞく形で、前提性としては假定をあらはす。すべて未然の意義がこの形に含まれてゐる。連用形は動詞單獨の用法としては敘述性の中止と名詞に轉ずるとの二つがある。

鳥 歌ひ、花わらふ。

霞 たなびき、春の光山野に滿つ。

右の「歌ひ」「たなびき」は「鳥」「霞」なる主語について敘述し中途でちよつと打切つた形である。「霞」「光」は動詞から名詞にかはつてしまつたのである。

勉強をしに毎日圖書館に通ふ。

右の「し」は上に對しては動詞で、下の「に」へつゞく點は名詞で、英語のゼランドに當るのも連用形から名詞に轉じた用法である。

【註 動詞の名詞性といふのは動詞でありながら、名詞の用法をするのをいふ。こゝのは動詞から名詞へ轉じたので混じてはならぬ。】

連用形の動詞連續用法としては時の助動詞(「ん」「り」を除く)につゞくこと、用言につゞいて熟語をつくること、この二つである。

二十五 終止形は終止の用法や名詞に轉ずるのは動詞單獨の場合で、推量の助動詞につゞいたり助詞「とも」「や」につゞくのは連續用法である。光ヒカ 渡ワタ 競キョウ等の人名や「すまふ」「しのぶ」(忍草)「かけろふ」(陽炎)は終止形から名詞になつたのである。

連體形は單獨では敘述性用法と形容性用法と名詞性用法とであり、連續用法としては熟語をつくり、(例垂木・鳴神・釣瓶) 體言又は指定助動詞「なり」「の」「が」を上にもつた比況の助動詞「如し」につゞくのである。連體形の敘述性用法は大切な事柄で「ぞ」「なん」疑問反語の「や」「か」が上に來たときにこの形で終止する。又係がなくても含蓄の場合もこの形で終止するのである。(係結については丙一(33)の解説を見よ)

二十六 已然形は單獨で敘述性用法をなす。これは「こそ」の結に限る。連續用法としてはたゞ「ば」「ど」「ども」につゞいて前提性用法をなすだけである。

命令形は命令を表すだけで、下につくのは助詞「よ」「や」「かし」である。
註 命令形の下に四段ナ變ラ變の外の動詞には「よ」をつけることになつてゐる。古は「よ」をつけなかつたが、いつのまにか附けるやうになつた。これについてこの「よ」を連體形につく「る」已然形につく「れ」と同様に語尾に見る説と、これは助詞だからつけない説と二つある。解説はすべて

つけないで置いた。括弧の内に入れて置くのは穩當かと思ふ。

二十七

| 動詞 | 活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|----|--------|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 行 | 活四用段 | カ | キ | ク | ク | ケ | ケ |
| 見 | 活上用一段 | ミ | ミ | ミル | ミル | ミレ | ミ(ヨ) |
| 蹴 | 活下用一段 | ケ | ケ | ケル | ケル | ケレ | ケ(ヨ) |
| 起 | 活上二段 | キ | キ | ク | クル | ケレ | キ(ヨ) |
| 受 | 活下二段 | ケ | ケ | ク | クル | クレ | ケ(ヨ) |
| 來 | 活變カ用格行 | コ | キ | ク | クル | クレ | コ(ヨ) |
| 爲 | 活變サ用格行 | セ | シ | ス | スル | スレ | セ(ヨ) |

| | |
|------------|------------|
| 有 | 死 |
| 活變ヲ 用格行 | 活變ナ 用格行 |
| ラ | ナ |
| リ | ニ |
| リ | ヌ |
| ル | ヌル |
| レ | ヌレ |
| レ | ネ |

以上で入試問題活用形動詞（文語）は答案を立派に作れるわけである。試みに左の一間に答へて見よ。

左ノ文章ノ中、動詞ニハソノ右側ニ傍線ヲ施シ、左方ニ何行何活用ナルカタ示セ 昭五六高（乙二）（2）ヲ見ヨ）

老いて後若き日の怠情を悔いて徒に死ぬるものすくなからざるは眞に寒心に堪へざるなり
思つてここに至れば青年よろしく努力す可きなり

右ノ動詞ノ活用表ヲ作ツテ、ココニアルノハ何形カタ示セ。

『注意 解説篇ノ左ノ所ヲ必ず参考ニセヨ。』

- 丙一1) (大正二陸經理)
- 丙一2) (大正四專檢)
- 丙一3) (大正九東高師)
- 丙一10) (大正四專檢)

四 自動詞 他動詞

二十八 動詞に動作性と存在性との二種があつて終止形でウ韻とイ韻とのちがひのあることを述べて置いた。その動作性に自然に行はれるもの、例へば「山見ゆ」「花散る」の「見ゆ」「散る」等と、その動作を受ける目的のあるもの、例へば「山を見る」「花を散らす」の「見る」「散らす」のやうなものと二種ある。前者を自動詞といひ、後者を他動詞といふ。存在性のもは自動詞である。目的になる語を客語といふ。「を」は多く客語に伴ふ。

次ノ動詞ニツキ自動他動ヲ示セ。

- 一、小兒 眠る。
- 二、牛、車を引く。
- 三、鳥 歌ひ花わらふ。
- 四、馬 走る。
- 五、犬 人を噛む。
- 六、山を登る。

「歌ひ」は上に「歌を」といふ目的語即ち客語を省き、「登る」の「山を」は標準であつて客語でない。「池をめぐる」「國を去る」「空を飛ぶ」「川を泳ぐ」「花を散らす」の「を」で下は自動詞である。議論をする餘地が十分ある。しかし慣例でかうなつてゐる。(丙一(31)「を」の用法についての問題解説を見よ。)

二十九

開く 戸は開く (自)
戸を開く (他)

増す 水は増す (自)
水を増す (他)

吹く 風吹く (自)
笛を吹く (他)

引く 後へ引く (自)
車を引く (他)

笑ふ 人が笑ふ (自)
人を笑ふ (他)

右は同じ動詞でも用法によつては自動にも他動にもなる例を示したのである。かういふのは数が二十あまりある。

三十

自動詞ばかりで之に對する他動詞のないものがある。

行く。 咲く。 居る。

老ゆ。 死ぬ。 有り。

三十一

反對に他動詞ばかりで自動詞のないものがある。

打つ。 着る。 貸す。 食ふ。 殺す。 強ふ。

三十二

自動詞他動詞が同形で、活用の種類を異にするもの。二三の例を示す。

四段—自動詞

下二段—他動詞

止む 雨止まん

止む 讀書を止めず

立つ 樹立たず

立つ 柱を立てず

進む 兵士進まん

進む 位を進めたり

育つ 子育たん

育つ 子を育てん

四段—他動詞

下二段—自動詞

焼く 家を焼きけり

焼く 家は焼けず

折る 枝を折らず

折る 枝折れず

缺く 席を缺かず

缺く 缺けたることなし

碎く 心を碎かず

碎く 當りて碎けず

捌く 品物を捌きつ

捌く 一向に捌けず

右は活用に關係がある。

左ノ動詞ノ活用ノ種類ヲ問フ。 昭四、高知高校

但シ自動・他動ノ兩用アルモノハ各別ニ之ヲ示セ。

- (イ) 吹く
- (ロ) 並ぶ
- (ハ) 折る
- (ニ) 射る
- (ホ) 経
- (乙)ノ二ノ一九問

三十三 　　る——自動詞　　す——他動詞

- 起る
- 起す
- 亂る
- 亂す

三十四 塵 積りて山をなす (大正十二女高師)
自動 他動

叙述の調和の自動・他動に關し、右の問題は誤である。

- 塵 積りて山となる。
- 塵 積りて山をなす。

右の通に改めるといづれも正しい。(丙)四の23問)

三十五 父子相繼いで王事に死す。その忠烈大に人を感じるものあり。芳名の赫々として千載に傳ふるもまた宜ならんや (大正十一東高師) (丙四の20問)

なほ正誤のところでも自他の呼應が出てくる。

五 文語動詞活用の深究

| | | | | | | | | |
|-----|-----|---|---|---|----|----|---|-------|
| 三十六 | おはす | さ | し | す | す | せ | せ | サ行四段 |
| | おはす | せ | せ | す | する | すれ | せ | サ行下二段 |
| | おはす | せ | し | す | する | すれ | せ | サ行變格 |

右のやうに一語で三つの活用をもつてゐる語がある。そこで特定の文中の動詞を指して活用を問はれる時は活用は一つでよいが、たゞ「おはす」として活用を問はれた場合は三つを擧ぐべきである。三つも活用のあるのは大抵四段と上二段と下二段とが多い。いつも活用には自動・他動を離れて考へてはならぬ。

- (一) 何が、。
- (二) 何を、。

かう細心に注意すべきである。

三十七 能をつかんとする人は (徒然草百五十段)
「つく」は自動四段・他動下二段となつてゐる。ところが極古いのにも他動四段もあることが右の例

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 死 | 有 | 釣 | 積 | 飛 | 思 |
| ナ | ラ | ラ | マ | バ | ハ |
| ニ | リ | リ | ミ | ビ | ヒ |
| ヌ | ル | ル | ム | ブ | フ |
| ヌ | ル | ル | ム | ブ | フ |
| ネ | レ | レ | メ | ベ | ヘ |
| ネ | レ | レ | メ | ベ | ヘ |

『註一、未熟のうち未熟(ナイ)連用(マス)終止(ダラウ)連體(ト)已然(バ)につけて語尾を出す。』

二、終止形と連體形とは口語ではどの活用でも同一である。

三、已然形で假定前提用法をなし、未然形から「ば」につゞく用法は消滅した。それで已然形を假定形と改めていふ人もある。』

四十

上一段活用

文語の上二段は口語では上一段にかはる。

われ之を恥づ (文語)

恥ぢル (口語) 終止形

恥づることなし (同)

恥ぢル (同) 連體形

恥づれば努力せよ (同)

恥ぢレ (同) 已然形

ウ韻がイ韻になり、又終止形と連體形とが同形になつた。

| | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| (居) | (射) | (見) | (干) | (煮) | (著) | 懲 | 報 | 試 | 延 | 強 | 恥 | 朽 | 過 | 生 |
| キ | ギ | チ | ヂ | ビ | ミ | リ | キ | ニ | ヒ | ミ | イ | リ | キ | キ |
| キ | ギ | チ | ヂ | ビ | ミ | リ | キ | ニ | ヒ | ミ | イ | リ | キ | キ |
| キル | ギル | チル | ヂル | ビル | ミル | イル | ル | キル | ニル | ヒル | ミル | イル | ル | キル |
| キル | ギル | チル | ヂル | ビル | ミル | イル | ル | キル | ニル | ヒル | ミル | イル | ル | キル |
| キレ | ギレ | チレ | ヂレ | ビレ | ミレ | イレ | レ | キレ | ニレ | ヒレ | ミレ | イレ | レ | キレ |
| キ(13) | ギ(13) | チ(13) | ヂ(13) | ビ(13) | ミ(13) | リ(13) | キ(13) | ニ(13) | ヒ(13) | ミ(13) | イ(13) | リ(13) | キ(13) | キ(13) |

『註 文語上一段は口語でもやはり上一段である。』

四十一 下一段活用 文語下一段は口語下一段となる。

不審の箇所を師に尋ぬ (文語) 尋^ネル (口語) 終止形
 尋ぬる生徒は學業進む (同) 尋^ネル (同) 速體形
 尋ぬれば興味生ず (同) 尋^ネレ (同) 已然形

| | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 流 | 覺 | 褒 | 弛 | 教 | 尋 | 出 | 捨 | 交 | 馳 | 告 | 避 | (得) |
| レ | エ | メ | ベ | ヘ | ネ | デ | テ | ゼ | セ | ゲ | ケ | エ |
| レ | エ | メ | ベ | ヘ | ネ | デ | テ | ゼ | セ | ゲ | ケ | エ |
| ル | エル | メル | ベル | ヘル | ネル | デル | テル | ゼル | セル | ゲル | ケル | エル |
| ル | エル | メル | ベル | ヘル | ネル | デル | テル | ゼル | セル | ゲル | ケル | エル |
| レ | エ | メ | ベ | ヘ | ネ | デ | テ | ゼ | セ | ゲ | ケ | エ |
| レ | エ | メ | ベ | ヘ | ネ | デ | テ | ゼ | セ | ゲ | ケ | エ |
| ル | エル | メル | ベル | ヘル | ネル | デル | テル | ゼル | セル | ゲル | ケル | エル |
| ル | エル | メル | ベル | ヘル | ネル | デル | テル | ゼル | セル | ゲル | ケル | エル |

| | |
|------|------|
| 植 | 蹴 |
| エ | ケ |
| エ | ケ |
| エル | ケル |
| エル | ケル |
| エレ | ケレ |
| エ(ロ) | ケ(ロ) |

「註「蹴」は四段にいふ地方もある。」

四十二 カ行變格 サ行變格 終止形だけがふ。

人來と見しは案山子なりけり (文語) 來^ル (口語) 終止形
 夜もおそくまで勉強す (同) 來^ル (同) 終止形

| | | | |
|------|------|------|------|
| (來) | コ | (來) | キ |
| シ | セ | シ | セ |
| スル | クル | スル | クル |
| スレ | クレ | スレ | クレ |
| シ(ロ) | セ(ロ) | シ(ロ) | セ(ロ) |

「註一、カ變に未來(又は推量決意)の助動詞がつくときには未然形と連用形と兩方から「ヨウ」につく。いづれも正しい。

魚釣に行つて來よう。 又 來よう。
 二、サ變からの場合は次のやうに「し」をつかふ。「せう」は近頃用ゐない。
 大に奮發しよう

三、サ變の未然形・命令形に關西式「セン」「セヨ」と關東式「ヤナイ」「シヨウ」「シロ」と二つある。そのうち「し」の方になつてしまふであらう。』

四十三

漢語又は國語の名詞を動詞として用ゐる場合に、文語ではすべて佐行變格に活用する。口語ではこの慣用が左の通區々である。

| | | | | | | | | |
|----|---|---|----|----|----|---|----|------|
| 勉強 | シ | セ | スル | スル | スレ | シ | セ | サ行變格 |
| 察案 | ジ | シ | シル | シル | ジレ | ジ | シ | 上一段 |
| 議 | サ | シ | ス | ス | セ | セ | 四段 | |

之をどう解決してよいものか。四段は蕪雜な言ひ方であるから、なるべく避けたい。

鬱 察 結^ツ 案 煎 焙 封 御覽 (字音の口語化したもの)

右は上一段にいられる。江戸時代から「藥を煎じさせる」といふ言ひ方をしてゐる。

禁 吟 變 信 論 感 命 映 應

右は關東式のサ變がよいと思ふ。但し「感じる」と近頃つかふやうに見受ける。諺に「案じるより産むが易い」といふ。「感じる」も似てゐるからこれだけ上一段と是認してよからうか。

四十四

「飽く」「足る」「借る」を關東語として「飽きる」「足りる」「借りる」と上一段に活用することを認め、語法上之を是認する。關西で「かうて來る」^買を關東では「買つて來る」といふ。關西で「借つて來る」といふのを關東では「借りて來る」といふ。上一段活用である。

四十五

可能の意味をあらはす下一段の動詞。四段の動詞に可能の助動詞「レル」が連つたときは、次のやうに約つて下一段の動詞になつてしまふ。動詞・助動詞の二つの語とは認めないのである。

- 書かれる。——書ける。
- 漕がれる。——漕ける。
- 押される。——押せる。
- 打たれる。——打てる。
- 死なれる。——死ねる。
- 救はれる。——救へる。
- 飛ばれる。——飛べる。
- 讀まれる。——讀める。

切られる。——切れる。

これは室町時代からあつたのである。これで口語下一段活用の語の数が殖えたわけである。

四十六 動詞について文語口語の比較。(一)活用の種類からいふと口語では四種類減じて五種となつた。四段別格の二つが四段に編入になつた。二段活が消滅して上二段が上一段となり、下二段が下一段となつた。(二)活用形の方では終止形はあるが、連體形と同一の形になつてしまつた。もと文語では四段・上一段・下一段だけが終止形と連體形と同じ形である。口語では全部同じくなつたのである。(三)連続の上からいふと、助詞「ば」が口語では未然形からつかなくなつた。未然形の用法は減少したわけである。この缺損を已然形で埋めあはすことにし、尙ほ外に連體形から助詞「なら」につづいて表す。「咲くなら」「見えるなら」等いふ。(四)以上は減少した方をいつたのであるが、發生した方からいふと、下一段活用に可能の意味をあらはす一群の語が發生した。關東で發生した「飽きる」「借りる」「足りる」が認められた。サ變口語から字音の口語化した一群の語が上一段として認められた。要するに一段活の語が非常に殖えて四段の次に位するに至つたのは、口語動詞の特筆大書すべき現象である。下一段はもと文語ではやつと「蹴る」一語。それも上古は「クエ」「クウ」と下二段で、中古語として發生し、本居春庭の詞の八衢にもまだ認められなかつた下一段が、かうも繁昌しようとなつた。

は誰も思はなかつたことであらう。

『註 本居春庭は江戸時代の語學者で、詞の八衢といふ不朽の名著を出した人である。この書には動詞の活用が組織立て、調べてある。』

四十七 以上で口語の動詞がまづ濟んだので、問題も解けることと思ふ。あとは練習に力を入れるとよい。解説書を見て貰ひたい。問題に

左ノ語ノ活用ヲ問フ。

(イ)吹く (ロ)並ぶ (ハ)折る (ニ)射る (ホ)經

と出たとする。文語とも口語とも表してないが、(ロ)(ホ)は文語である。口語にはそんな終止形をもつた動詞がない。(イ)と(ハ)の半分他動詞の方と(ニ)とは文語にも口語にもある。しかし同一の活用であるから、この問題はこの通でよいのである。答案も 文語だけの活用でよろしい。しかし受験者はまづどの問題でも口語か文語かを先にきめてかからないと、無駄をすることがあるから、氣をつけるがよい。解説の中の参考とすべきところを擧げて置く。

丙一總演習ノ(三)問(四)問

甲ノ(三) 乙二ノ(十二)ノ(ロ) 同(十四)

敬語の動詞はあと廻しにして、動詞はこれでうちきる。

第二章 形容詞

三四

(一) 天高く、氣清し。

(二) ことしの暑さは例年よりも厳し。

(三) 深いところに良い魚ををる。

(四) 田舎は淋しいし都會はさわがしい。

四十八 右の「高く」「清し」「厳し」「深し」「良し」「淋し」「さわがし」は事物の性質情態をさひあらはしてゐる語で、これを形容詞とす。

四十九 叙述性。右の例の(一)(二)(四)は皆叙述性用法を表してゐる。これは國語の形容詞特有の事實で、随つて形容詞に活用がある。外國語の形容詞には無い。文語では叙述の形式が次の通りである。

花の下は 氣持よし。 終止形

春やとき 花や遅き。 連體形

祝ふ今日こそたのしけれ。 已然形

叙述について動詞とちがふ點は三つある。

一、時に關した叙述の出来ないこと、形容詞から時の助動詞がつどかない。これは性質情態を表す形容詞の本性上當然のことで、形容動詞に變形させての上で時に關した叙述を果たすのである。

花の下は氣持よかりき。

二、命令の叙述の出来ないこと。形容詞に命令形が無いのはこのわけである。

三、助動詞は殆ど形容詞につかない。「なり」「ごとし」がつく位で他の助動詞と没交渉である。随つて叙述に於て大きな缺損がある。文語では推量の叙述も不可能であれば、又文語口語ともに使役・受身・可能の叙述も出來ず、文語では敬語・打消の叙述も出來ない。叙述に於ては孤立無援の情態である。即ち叙述は形容詞の本務で無いことがわかる。随つて連續については簡單である。

それ故に形容性 形容詞の天分はその名の通り、形容性にある。右の例の(三)はこれに當る。形容性用法の活用形は動詞と同じく連體形といふ。この連體形の下に名詞を省くと連體形が名詞性用法をなすことも動詞とかはらない。

五十 連用形 名詞と副詞とに轉ずるのは連用形からである。
近くを通りたれば訪れぬ。

三五

鴨川 近く流る。

『註一』「近く流る」の「近く」を副詞とすることに、議論があるけれども、専門に互るから本書ではかうきめて置く。

註二 名詞には連用形と終止形とからなる。「すし」「からし」は終止形から名詞になつた例で、これも動詞に似てゐる。

註三 連用形から熟語をつくるのは動詞で、形容詞は語幹で熟語をつくる。うれし涙 高山等は、この例である。

連用形は「て」「とも」(文語)「テ」「テモ」「ハ」「モ」(口語)につゞく形と叙述の中止の形とである。

天 高く、氣清し。

始めはつらくとも辛抱せよ (乙三ノ一七問)

『註』「とも」は形容詞の未然形につくといふ説もある。「とも」に未然の意味があるから、この説を唱へるのであらう。』

しかし活用形その物に意味があるので、附く語に關係しない。「つらくアリとも」の「アリ」が省かれ

たので、連用形に「とも」が接することに定める。試験の答案に二つ説があつて自分はその中のどれに據るといふことを附記する方がよい。

五十一 前提用法と未然形・已然形

大黒は金を世界に預け置くほしくばやらん働いて取れ。
ほしければ働きつ。

右のやうに文語では未然形から「ば」について假定の前提となり、已然形から「ば」に接して既定の前提となる。

口語では「ば」のつくのは已然形だけであるから未然か已然か假定か既定かは文の前後の意味できめるのである。口語のこの用法に慣れた現代の人には、文語にはつきりとした用法意義のちがひがあることを十分承知しなければならぬ。正誤法の問題のところに出てくる。

五十二 形容詞の活用形を圖に示せば左の通。

| | | | | | | |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 語 | 活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 |
| 近寒赤 | 活久 | ク | ク | シ | キ | ケレ |

| |
|-----|
| 陸怪忙 |
| 活久志 |
| シク |
| シク |
| シ |
| シキ |
| シケレ |

口語の形容詞の活用形を圖に示せば左の通。

| 寂 | 遠 | 語 |
|---------|--------|-----|
| 活久志 | 活久 | 活用 |
| シク(ナイ) | ク(ナイ) | 未然形 |
| シク(テ) | ク(テ) | 連用形 |
| シイ(ラシイ) | イ(ラシイ) | 終止形 |
| シイ(カ) | イ(カ) | 連體形 |
| シケレ(バ) | ケレ(バ) | 已然形 |

【註】 志久活を左の通にする説もある。

| | | | | | | |
|----|----|---|---|---|---|----|
| 怪シ | 文語 | ク | ク | ○ | キ | ケレ |
| 寂シ | 口語 | ク | ク | イ | イ | ケレ |

右は「シ」を語幹に入れたのである。文語の終止形に語尾のないことになる。』

五十三

形容詞の各活用形につくのは、次の通である。

| 語 | 口 | 文 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 |
|----|---|----------------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| ない | | バ | | | | | |
| | テ モ ハ | テ トモ モガ モガナ | | | | | |
| | あります ありません ございます ございません ぞんじます | | | | | | |
| | トカラノデノニケレド ガシ | ト ヤ ナ ヤナ | | | | | |
| | らしいだらうのだのだつた です せう でした のでせう でした | なり カガチ ニゾカナ | | | | | |
| | バ | ド ドモ バ | | | | | |

右の片假名は助詞、平假名は助動詞又は動詞である。

五十四

形容詞の「ナイ」は漢字で書いてよいが、助動詞になつた「ナイ」を漢字で書いてはならぬ。

左ノ三ツノ「ない」ノ異同ヲ説明セヨ。

御配慮まことにかたじけない。

いかなる時の革新にも婦人の覺醒を伴はない場合はない。(乙一の(八)問。解説はそのところを見よ。)

次ノ文ニ誤アラバ正セ。(甲の二二問)

一寸池があるやうに見え無い。

『註 意義が形式化してゐるからである。』有る「無い」の原の意味から變つて廣く打消を表す形式語である。

打消のあらゆる型にあてはまるのを形式化といふ。意義の形式化は助動詞の一特徴である。』

五十五

實地に當つて形容詞であることを知るのには、形で見るのが一番早い。動詞は同じ行に活用するが、形容詞はカ行とサ行とに互つて活用する。口語はイ音便である。今一つの見わけ方は連體形で見るので、形容詞は必ずイ韻、動詞はウ韻である。

高き山 (イ) 美しき花 (イ)

打つ音 (ウ) 流るる水 (ウ)

五十六

「あり」の所屬品詞其他。和蘭語の文法では「あり」を形容詞の中へ入れてゐる。江戸時代

の鈴木服も「あり」を形容詞とした。「或人」の「或」は意味が餘程形式化してゐるので、之を形容詞とする説もある。しかし時の助動詞に連続して、「ありたり」「ありき」「あらん」といひ、又連體形がウ韻であるから、「あり」は動詞である。

「あり」は文語では生物にもつかはれる。例へば「人やある」といふ用例でもわかる。口語で無生物や植物に「ある」を用ゐる。人や動物に「ゐる」「をる」をつかふ。「て」の下に用ゐられる時は、此の區別がなく、無生物にも「てゐる」「てをる」を用ゐる。「本が机の上に置いてある。」の例にあるやうな「を」の代りの「が」と下に他動詞をつかつたところに「てある」を用ゐる。

「雨がふつてゐる」「鳥が啼いてゐる」「机の上に本が、置いてある」「馬に鹽俵がつけてある」「てゐる」「てをる」「てある」を一語として助動詞とする説と「て」は助動詞の連用形、「ゐる」「をる」「ある」を動詞と見る説と二つある

第三章 形容動詞

- (一) 遠からん者は音に聞け。
- (二) 水澄みて底鮮かなり。
- (三) 冬 暖に 夏涼しき家なり。
- (四) 並居る志士 慨然たり。

五十七 右の「遠から」「鮮かなり」「暖に」「慨然たり」は形容詞のやうに事物の性質情態を言ひあらはし、動詞のやうに活用してゐる。之を形容動詞といふ。品詞は動詞に属するものである。

五十八 情態性叙述 右の(一)(二)(三)(四)の例は叙述性用法の形容動詞である。その中(三)は中止叙述で、他は終止叙述である。元來形容動詞はラ變動詞「あり」の熟語である。それゆゑラ變動詞に入れてよいのに、入れないで特に形容動詞と稱するわけは、「あり」は存在を表すに對し、これは情態を表すからである。「たり」といふ時の助動詞はその實完了の情態を表す語である。「あり」は「ありたり」とつゞくが、形容動詞が「たり」と連続しないのは連続の必要が無いからである。既に情態の叙述の語に情態の助動詞を添へる必要を認めないのである。

五十九 「く」「に」「と」。叙述の力は「く」「に」「と」にある。下についた「あり」は叙述を滑かにし、且つ助動詞に連続する必要上ほんの結びついただけのものである。その證據には中止叙述の時は「あり」が落ちてしまつて、「く」「に」だけで立派に叙述をなしてゐる。前の(三)はその一例である。但し「と」は下に「して」をつけて中止する。

六十 形容動詞の活用は次の通。

| 口 語 | | 文 語 | | | |
|------|----|-----|----|----|----|
| 多 | 未然 | 堂々 | 暖 | 多 | 未然 |
| カラ | 連用 | タラ | ナラ | カラ | 連用 |
| カク | 終止 | タリ | ナリ | カリ | 終止 |
| ○ | 連體 | タル | ナル | カル | 連體 |
| ○ | 已然 | タレ | ナレ | カレ | 已然 |
| (カレ) | 命令 | タレ | ナレ | カレ | 命令 |

| | | | | | | | |
|----|---|-------|-------|------|------|-----|------|
| 口語 | 暖 | ダラ(ウ) | ダツ(タ) | ダ(ネ) | ダ(ト) | (ナ) | (ナラ) |
|----|---|-------|-------|------|------|-----|------|

『註一、文語では三種類、俗にカリ活・ナリ活・タリ活と云ふ。口語ではタリ活はない。口語文に「堂々として」「断然として」など用ゐてゐるのは文語脈の混入である。これはタリ活の連用形に助詞「して」のついた熟語である。

註二、口語命令形の用法は極めて狭い。「よかれあしかれやつて見よう」「遅かれ早かれ出なければならぬ」等と用ゐるだけである。

註三、「暖テ」「暖ダ」を「テダ」活といふ。「テ」が基本語で「ある」に結びついて「る」が略されたのである。「テ」が爲に結びつくと「テス」ができる。「テス」は「テセ」「テシ」「テス」と活用する。

註四、「ニ」を基本とした「ニナ活」がもとあつて、「暖に」「暖な」と活用したが、「暖な」といふ終止形が方言となつて消滅して了つた。そこで一しよに入れる説と別にして取扱ふ説と二つある。「百五十四」を見よ。

六十一 未然形の書きあらはし方。

月が海岸では一段と明かあでしよう

右の表記法は誤である。「明かあでし」といふ未然形に「う」といふ推量の助動詞がついたのであるから、「明かあでせう」と書かねばならぬ。「四十二」(二十九頁)の註二の「大に奮發しよう」といふ

のは「爲る」といふサ變動詞の未然形に「よう」がついた場合、動作を「スル」意味がある。これには「スル」意味がない。

六十二 活用形「ナ」一つの語。「可笑」「大」「小」は「ナ」と活用して「チカシナ」「オホキナ」「チヒサナ」といふだけで、終止形もない。これをどの品詞にするか。叙述性を缺いてゐるから、動詞では勿論ない。形容詞にも入れられない。准形容詞として置く。「こんな」「そんな」「あんな」「どんな」も准形容詞である。

六十三 形容動詞の各活用形につく語は次の通である。

| 文語 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 |
|----------------------|-----------------------|-----------------------------------|------------------|---------|-----|
| る・らる・す・さす しむ・ずん・バ | たり・り・たし・テ きけり(ぬつ稀) | ナ禁止 トモ・ヤ | モハカゾ ナン カナ | ド ドモ | |
| 口語 | う | た <small>テ</small> モ ない(中止ニツク) | トカラノデノニケレド | | ○ |

『註一、 に入れた語は動詞について形容動詞につかないもの、これで動詞と形容動詞とのちがひがわかる。註二、平假名は助動詞を示し、片假名は助詞を表す。』

六十四 形容動詞と指定の助動詞

冬は暖なれども夏はあつき家なり。

右の上は情態をいつたので「なれ」は形容動詞の語尾。下のは事物についての断定で、指定の助動詞である。

暖なり トイフフウデアル 情態叙述

家なり トイフモノ(コト)デアル 断定叙述

叙述の性質を異にしてゐる。又「あり」の落ちたところの「に」の場合を考へるとよくわかる。

暖に トイフ情態 副詞 一語となる。

家に トイフモノ(コト)ニ 名詞助詞 二語である。

第四章 助動詞

- (一) 慶長五年の事なり。
- (二) 羣れ飛ぶ鷗落花の風に飄るが如し。
- (三) 衆人の中にてほめらる。
- (四) 午後になれば雨やまん。

六十五 右の「なり」「如し」「らる」「ん」は名詞・動詞等に結びついて叙述を助けてゐるもので、之を助動詞といふ。叙述は主として動詞のする仕事であるが、(三)のやうな受身や(四)のやうな未來についての叙述は、助動詞によつて助けられるのである。又(一)の名詞「事」や(二)の名詞性の動詞「飄る」には本來叙述性がない。そこへ動作の代りに行つて叙述性を創造するのは助動詞である。これは主として断定と比喻との二性質の叙述について行はれる。随つて助動詞は次の二つに分けられる。

- 一、叙述の添加 動詞又は他の助動詞につく
- 二、叙述の創造 名詞等につく

『註 叙述の創造の場合は主として名詞につくが、又代名詞・副詞・助詞につくこともある。助詞は「が」「の」の二つで、動詞の名詞性を助ける助詞である。

汝は汝たれ、我は我たらん。 代名詞につく

洋行は此度が始めてなり。 副詞につく。』

一、受身の助動詞

後より 押さる。

母子に 泣かる。

旅人 道を里人に教へらる。

馬に 蹴らる。

六十六 右は他から動作をしかけられる意味で、即ち受身の叙述である。「る」「らる」の二語は上の動詞を助けて受身の意味を添へ加へるもので、之を受身の助動詞といふ。

むつかしけれど讀まば讀まる。

逃げんと思はば逃げらる。

六十七 右の「る」「らる」は己が力のできるといふ意味を表すもので、可能の助動詞といふ。受身には主語述語の外に標準の語「何に」といふがある。可能には標準の語がない。

故郷の事なつかしく思ひ出さる。

とかく行末のみ案ぜらる。

六十八 右の「る」「らる」は可能の意から轉じて、動作が自から發して遏められない意味となつたので、之を自然可能又は自發の助動詞といふ。

先生は黒板に文字を書かる。

父は今朝神戸へ向つて出發せらる。

六十九 右の「る」「らる」は可能の意から轉じて、動作を敬ふ意となつたもので、之を敬語の助動詞といふ。

七十 「る」「らる」は添へ加へる意味によつて一受身、二可能、三自發、四敬語の四通になる。

それは文章の關係から考へて意味で見分けるのである。試みに次の文で見わけて見よ。

(一) 徳望ある人は衆人に尊敬せらる。

(二) そのうれしさ、筆には盡されず。

- (三) 人に卑めらるゝは自から卑むが故なり。
- (四) 捨てられし兒の身の上思ひやられてあはれなり。
- (五) 年號を昭和と改められたり。

七十一 「る」「らる」はもと一つの語であつた。「る」は「らる」の「ら」が落ちたのである。それゆゑ活用は同じである。右の(一)は終止形の場合、(二)は「ず」につづいてゐるから未然形。(四)

(五)は時の助動詞につづいてゐるから連用形(三)は下に「コト」を省いた名詞性で連體形。あとは「ども」をつけて已然形を出し、「よ」をつけて命令形を出すと次の活用ができる。

| 種類 | 原形 | | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|
| | 受身 | 敬語 | | | | | | |
| 受身 | る | らる | レ | レ | ル | ルル | ルレ | レ |
| 敬語 | らる | らる | ラレ | ラレ | ラル | ラルル | ラルレ | ラレ |
| 可能 | る | | レ | レ | ル | ルル | ルレ | 〇 |
| 自發 | らる | | ラレ | ラレ | ラル | ラルル | ラルレ | 〇 |

活用は最も大切であるから十分に練習して置くがよい。右は下二段活で可能自發には命令形がない。

七十二 口語では下一段に活用し、未然形には「ナイ」「マイ」「ン」「ヨウ」、連用形には「タ」「タイ」「マス」「ナサル」、已然形に「バ」、命令形に「ヨ」「ロ」がつく。終止形・連體形に接する語は實に多いから代表のものだけにして置いたのである。

| 種類 | 原形 | | 下ニツクコトバ | |
|----|----|----|---------|-----|
| | 受身 | 敬詞 | ナイ | マイ |
| 受身 | レ | レ | ヨウ | ナイ |
| 敬詞 | ラレ | ラレ | マス | タイ |
| 可能 | レ | レ | | ラシイ |
| 自發 | ラレ | ラレ | ダ | ラウ |
| | | | カ | ト |
| | | | バ | |
| | | | ヨ | ロ |

七十三 可能の助動詞が動詞に結びついて一語となること。書かれる―かける。押される―押せる。讀まれる―讀める。取られる―取れる。等四段の動詞に「れる」が結びついて下一段の動詞となる。

(「四十五」節(三十一頁)参照)

丙一の一四問題を見よ。

二、使役の助動詞

- (一) 騎兵馬を走らす。
- (二) 子供を朝早く起きさす。
- (三) 主人大工に家を建てしむ。

七十四

右の「す」「さす」「しむ」は動詞に結びついて、或動作を行はせる意味を添へ加へるもので、之を使役の助動詞といふ。これには必ず目的又は標準の語を要する。(一)は「馬」(二)は「子供」(三)は大工がその語で、動作をする主體である。之を通常相でいふと、

- (一) 馬 走る。
- (二) 子供 朝早く 起く。
- (三) 大工 家を 建つ。

以上のやうである。使役相になると別に主語が出来て、使役する主體となり、これまでの主語が目的又は標準の語即ち客語又は補語となつて使役を受けるのである。

字を巧に書かせらる。

大に民心を得させ給ふ。

御年十六にして御位に即かしめ給ふ。

七十五

右の「せ」「させ」「しめ」は使役の意味から轉じて他の動作を敬ふ意をあらはす、之を敬語の助動詞といふ。この場合は必ず「らる」「給ふ」の上にある。單獨には用ゐられない。右のうち「しめ」は重い敬語である。

七十六

使役か敬語かを見分けるのは文意を考へ、標準の語が必要であるか否かをも見るのである。試みに次の文で判断して見よ。

- (一) 醫たらしめんか、儒たらしめんか。
- (二) 京都に行幸せさせ給ふ。
- (三) 親に心配せさするは不孝の第一なり。
- (四) 先生は來月横濱に著かせらるゝ筈なり。
- (五) 貧民に生活の安定を得させよ。

七十七

「す」と「さす」とは同じ語であつて中古から出來たもの、「しむ」は古くからある。皆下

二段活、右の(一)は「ん」につづいた未然形、(二)はもと動詞で形式語となつて助動詞にかはつた「給」ふにつづいた連用形。(三)は下に「コト」を省いたので連體形、(四)は「らるる」につづいた未然形、(五)は命令形である。

| | | | | |
|----|----|----|----|-----|
| | | | 原形 | 下ニ |
| | | | ツク | 語 |
| す | セ | セ | ばん | ずらる |
| さす | サセ | サセ | 給 | たり |
| しむ | シメ | シメ | やら | べとも |
| | | | ん | し |
| | | | なり | ぞか |
| | | | ば | ども |
| | | | | よ |

七十八 口語の使役の助動詞は「せる」「させる」の二つで下二段活である。「しむ」は口語に用ゐない。用ゐてゐるのは文語の混入である。

| | | |
|-----|----|-----|
| | 原形 | 下ニ |
| | ク | 語 |
| せる | ナイ | ヨウイ |
| させる | サセ | マタ |
| | セル | ダライ |
| | セル | コト |
| | セレ | バ |
| | セ | ロヨ |

丙一の三及一七問題参照。

三、敬語の助動詞

七十九 三種類 一尊敬語、敬はれる人の動作存在につく。「る」「らる」「せらる」「させらる」「給ふ」「(四段)」「せ給ふ」「させ給ふ」二謙遜語、自分の動作につけ間接に先方を敬ふもの、「給ふ」(下二段)「奉る」「聞ゆ」「三鄭重語、對話敬語ともいふ。言葉遣を丁寧にする爲に添へるもの、「侍り」「候」この外に「みはかし」「みとらし」の「し」として残つてゐる古い尊敬語の「す」があつて上古だけにつかはれた。文語はこの通である。

次の解説を見よ

例ヲ擧ゲテ敬語ノ助動詞(文語)ヲ説明セヨ。(丙一の十八問)

文語「讀む」ノアラル敬語ノ形ヲ示セ。(甲の二十問)

見奉る、見侍り、見給ふノ別。(乙四の九問)

八十 口語敬語の助動詞 四通りになつてゐる。「レル」「ラレル」可能から轉じたもの。先生は字を丁寧に書かれる。

校長はいつも早く来られる。

二は「ナサル」「下サル」を名詞や動詞に結びつける。

少し散歩なさつてはどうです。

ちよつとお待ち下さい。

三は「ニナル」を名詞につけ、名詞の上に「お」を冠らせる。

もうお着になる筈です。

四は「マス」をつけて言葉遣を丁寧にする。

君、そこはよく釣れますか。

丙一の二十間を見よ。

八十一

室町時代では使役から轉じた「セラレル」「サセラレル」を用ゐるが、今はつかはない。「歸らつしやる」「勉強さつしやる」はその詰つたものである。「いらつしやる」は「いらせられる」から、「おつしやる」は「仰せられる」からなつたのである。

八十二

「アソバス」といふ語は「ナサル」より一段と尊敬の意が深く貴族的である。「タマヘ」は命令形だけで、學生の言葉である。

八十三

敬語のいひあらはし方。一、接頭語や接尾語をつける。おほ君 おほみ世 おほん時 おん姿 ご料地 ぎよ意(以上文語) お宅 ご近所 おみ足(口語)

兄ぎみ 母ご 伯父上 林氏 松井先生 若枝くん 宮様がた 生徒さん 二、尊敬語の動詞を用ゐる。「居る」ことを古く「ます」といつた。四段活であつたが、下二段に後でなり、しまひに口語の「マス」になつてしまつたのである。又頭に「い」を冠らせて「います」となり、下「ます」をつけて「致します」ともなる。存在の敬語に「おはす」「おはします」もある。同一系の語である。「ます」に大を冠らせると「おほます」これが「おはす」である。皆「ます」から産み出されたのである。「與ふ」ことを「たまふ」といひ動詞から助動詞となつた。「賜ふ」は動詞として書き、「給ふ」は助動詞の時に書く。「貰ふ」意のは「たまはる」口語では「くださる」といふ。「くださる」は動詞にも助動詞にもつかふ。「する」ことを「あそぼす」といふ。もと文語であつたのが、口語にもつかひ、動詞がもとで助動詞になつた。「言ふ」ことを「おほす」「のる」「のたまふ」といひ、「おつしやる」といふ口語の動詞が「おほせらる」から出來た。「思ふ」ことを「おほす」「おもほす」「おほしめす」、口語にはない。「治むる」ことを「聞かす」といひ、轉じて「聞こす」「きこしめす」といふ。上の「す」は古い敬語の助動詞で四段活のものである。これが「食ふ」「飲む」「聞く」意になる。又「見る」こ

【註一、「トモ」は動詞では終止形・形容詞には連用形に接する。

【註二、形容詞に似てゐる點は三つある。一連続する助動詞は「なり」の外にない。これは形容詞もその通である。二「あり」と熟語をつくる。三連用形が副詞を作り又副詞性用法をなす。】

奥山は絶えず時雨す。副詞をつくる。

何事もなすず一日を暮したり。副詞性用法。

【註三、甲の(二)と(四)と(一〇) 乙の(六)と(一〇)と(一七)と(二〇)と(二六)の八問題は「ず」の活用の問題である。】

| | | | | | | | | |
|----|----|----------|-----------|----|----|-----------------|-----|--|
| ざり | 原形 | 下ニ ツク | シム ン・バ | ケリ | トモ | ベシ マジ メナリ | バドモ | |
| | 語 | マホシ | ケン | ザリ | ザル | ザレ | ザレ | |

| | | | | | | |
|---|--------------|---|----|----------|------------|---|
| じ | 下ニ ツク | | ヤト | (ノ 結) | (コソ ノ結) | |
| | 結 ト係 ノ | 〇 | ジ | ジ | ジ | 〇 |

【註「じ」に接するのは右に示した通り終止形に三語、連體形に「か」一つあるだけである。】

八十六

口語の打消の助動詞は「ン」「ナイ」「マイ」の三つである。

| | | | | | | |
|-----|--------|-----------------|----------------|--------------|--------|---|
| ん | 〇 | ズ(ニ) | ン(ラシイ ダラウ) | ン(ノダ) | ネ(バ) | 〇 |
| ない | 〇 | ナク(テモ) | ナイ(ラシイ ダラウ) | ナイ(ノダ) | ナケレ(バ) | 〇 |
| なか〇 | ナカラ(ウ) | ナカリ(サウダ ツ(タ) | マイ | マイ(モノ コト) | 〇 | 〇 |
| まし | 〇 | 〇 | | | | |

【註一、關東で「ん」を用ゐるのは「ません」といふ場合、「けしからん」の場合。外に禁止の場合「そんな」とはならん」皆終止形である。このほかは「ない」をつかふ。

【註二、「まし」文語では推量に入れ、「マイ」口語を打消に入れたのは、動詞からのつゞき工合を考へたからで、この次の章で述べる。】

五、時の助動詞

(一) 昨日大雪降りき。

- (二) むかし男ありけり。
- (三) やがて美しき花も咲かん。

八十七 右の「き」「けり」は事柄の過去に属する意味を添へ加へ、「ん」は未来の意を表するもので、いづれも時の助動詞である。

- (一) 昨日こそ早苗とりしか。 已然形
- (二) 君は幾日に著きしか。 連體形

八十八 「き」の活用も大切なものである。特殊活用で右の如き活用をなす。確に記憶し置くがよい。(一)と(二)との「か」は別である。(一)は已然形の語尾であり、(二)は問ひの助動詞である。「し」は連體形、「咲きし花」「降りし雪」「タ」といふ意である。

| | | | | | | |
|---|---|---|--|---|---|---|
| き | ○ | ○ | キ <small>(ヤ)</small> <small>(ト)</small> | シ <small>(カ)</small> <small>(ガ)</small> <small>(ナリ)</small> | シカ <small>(ド)</small> <small>(ド)</small> <small>(モ)</small> | ○ |
|---|---|---|--|---|---|---|

八十九 「けり」の活用は「アリ」と同じくラ變であるから、既知の知識ですぐわかる。

| | | | | | | |
|----|------------------------|---|---|--|---|---|
| けり | ケラ <small>(ズヤ)</small> | ○ | ケリ <small>(ヤ)</small> <small>(ト)</small> <small>(ト)</small> | ケル <small>(ナリ)</small> <small>(カ)</small> <small>(ラ)</small> <small>(ン)</small> <small>(ガ)</small> <small>(カ)</small> <small>(ナ)</small> | ケレ <small>(ド)</small> <small>(ド)</small> <small>(モ)</small> | ○ |
|----|------------------------|---|---|--|---|---|

『註 連用形は殆ど用例を見ない。命令形もない。「けらすや」は古い用法である。』

九十 未来の「ん」は未来の外に推量や決意の意をあらはすこともある。その活用は、

| | | | | | | |
|---|---|---|--|--|--|---|
| ん | ○ | ○ | ン <small>(ヤ)</small> <small>(ト)</small> <small>(ト)</small> | ン <small>(カ)</small> <small>(カ)</small> <small>(ナ)</small> <small>(ソ)</small> | メ <small>(ヤ)</small> <small>(ド)</small> <small>(ド)</small> <small>(モ)</small> | ○ |
|---|---|---|--|--|--|---|

『註一、これはたぶん古く、マミムムメメと活用したものが、ミミと命令形のメが廢れて、こんな特殊活用になつたものと臆測される。さう考へると記憶し易い。』

『註二、古くはミミと發音し、中古になつて、ミとなり尋いでミとなつたものであるから、和歌と上古語とだけ「む」と書き、中古以後の散文では「ん」と書くがよいかと思ふ。』

九十一 時間的に推移し完了する情態を示し、又單に強めとして用ゐられるものに、「ぬ」「つ」「たり」「り」の四つがある。「ぬ」はナ變動詞「往ぬ」が形式化してできた語であるから、活用もこれで

わかり、意味も自然にうつつていつて終る趣である。「つ」は「果つ」といふ動詞からできたので、活用は下二段である。もし活用を忘れた場合は、もとの語を思ひ出すとよい。「たり」「り」は「あり」の熟語で活用はラ變である。

| | | | |
|------------------|--------------------|------------------|--------------------|
| り | たり | つ | ぬ |
| ラ (バン) | タラ (バマンズ シ) | テ (マン シ) | ナ (マン シ) |
| リ (ツケキ リ) | タリ (ツケケキ ンリ) | テ (ケケキ ンリ) | ニ (ケケキ ンリ) |
| リ (ナト) | タリ (トトヤ モ) | ツ (トトヤ モ) | ヌ (ラメラベ シリシ) |
| ル (カナラ リシ) | タル (カナベ リシ) | ツル (ゾチガ ナ) | ヌル (カカナ リ) |
| レ (ドドバ モ) | タレ (ドドバ モ) | ツレ (ドドバ モ) | ヌレ (ドドバ モ) |
| レ | タレ | テ(ヨ) | ネ |

乙一の十三問 乙二の十六問 十七問 丙一の二十四問を見よ。

九十二

右の表の第一活にある「なん」「てん」「たらん」「らん」は未來完了といつて、未來や推量

や決意を強めたり、假定したりするときにつかふ。この「なん」はよく試験問題に出る。動詞の連用形について、「タラウ」といふ意の「なん」である。(丙一の二十五問を見よ。)

花の散りなん後ぞこひしかるべき

「らん」も「たらん」と同じ意味で、推量の「らん」とちがふ。古い用法である。

かゝる災にあへらん人こそ不幸なるべけれ

「たひたらん人」の意で、「タラウ」といふ口語に當る。四段の已然形サ變の未然形だけにつくのである。

滄浪の水すめらば……濁れらば……スンデキタラ

鳥の跡久しくとどまれらば……トドマツテアツタラ

「らば」も用法が古い。

丙一の十六問を見よ。

九十三

右の表の第二活にある、「にき」「にけり」「てき」「てけり」「たりき」「たりけり」は過去完了といふ。過去を強めていふ意味である。

九十四

原則や定理や格言や諺等は時に關係なく言ひあらはされる、之を恒久時といふ。又歴史上

の事柄は過去に属するものであるが、印象を強める爲に、わざと現在のいひあらはしをするのが多い。これを歴史的現在といふ。

九十五 口語における時の助動詞は、ずつと簡單になつて過去の「た」未來の「う」「よう」をつかふ。

| | | | | | |
|----|--------|--------|---------|---------|----|
| た | タラ (カ) | テ (キル) | タ (ラシイ) | タ (ノダ) | タラ |
| う | ○ | ○ | ウ (トモ) | ウ (ヅカ) | ○ |
| よう | ○ | ○ | ヨウ (トモ) | ヨウ (ヅカ) | ○ |

九十六 未來や決意の「よう」と様の字音から來た「やう」と書方を間違へてはならぬ。又「行きませう」などを「行きますよう」と書いてはならぬ。「ます」の未然形は「ませ」でそれに右の「う」がついたのである。

乙三の四問 八問

丙四の一問 同二十六問

九十七

- (一) 雪が 降つてゐる。 てゐた。 てゐよう。
- (二) 雨が 降つてをる。 てをつた。 てをらう。
- (三) 机に 本が置いてある。 てあつた。 てあらう。
- (四) 行列がいつてしまふ。 てしまつた。 てしまはう。

右の「てゐる」「てをる」は動作の現に行はれてゐることを表すので進行態といひ、「てある」は結果がまだつゞいてゐるので繼續態又存在態といひ、「てしまふ」は完了態といふ。完了態は單に意味を強めるだけの場合もある。

『註「てゐる」等の「て」を助動詞其の下を動詞と見る説もある。』

六、希望の助動詞

誰もかくあらまほし。

講堂にては靜肅にせられたし。

九十八

右の「まほし」「たし」は動詞及び助動詞に結びついて希望の意を添へ加へるもので、これ

を希望の助動詞といふ。活用は形容詞の志久活と久活とである。

| | | | | | |
|-----|---------|----------|--------|-------------------|---------------|
| まほし | マホシク(バ) | マホシク(トモ) | マホシ(ト) | マホシキ ヲカナ カナ | マホシケレ (ドモ) |
| たし | タク(バ) | タク(トモ) | タシ(ト) | タキ ナガカ ナリ | タケレ (ドモ) |

九十九

口語における希望の助動詞は「たい」一つで次の通活用する。

| | | | | | |
|----|--------|--------|---------|----------|--------|
| たい | タク(ナイ) | タク(トモ) | タイ(ダラウ) | タイ(ノダ) | タケレ(バ) |
| | | モテモ | ラシイ | カト カラ | |

七、推量の助動詞

問題解説 丙一總演習の第十五問を見よ。

八、咏歎の助動詞

人は皆花の衣になりぬなり。

盛衰定めなきは世の常なりけり。

100 右の「なり」「けり」は咏歎の意味を添へるもので、之を咏歎の助動詞といふ。口語には無し。

| | | | | | | |
|----|---|---|--------|---------|-------|---|
| なり | ○ | ○ | ナリ(ナヤ) | ナル(ヨカ) | ナレ(ヤ) | ○ |
| けり | ○ | ○ | ケリ(ナヤ) | ケル(ヨカナ) | ケレ(ヤ) | ○ |

九、指定の助動詞

- (一) 人は萬物の靈なり。
- (二) 休暇には旅行するなり。
- (三) 友は互に助けあふべきなり。
- (四) 我は我たり。

一〇一 右の「なり」「たり」は断定の叙述を創造するものである。之を指定の助動詞といふ。(一)
 (三)は體言を略した名詞性の動詞・助動詞に「なり」の接した例である。咏歎の「なり」は指定の意
 味の失せたもので終止形につき、指定の「なり」は名詞又は連體形からつく。活用はラ變である。

| | |
|---------------------------------|---------------------------------------|
| たり | なり |
| タラ <small>ズバンシム</small> | ナラ <small>ズバンシム</small> |
| タリ <small>ケケキ ン</small> | ナリ <small>ナニ ケケキ ン</small> |
| タリ <small>ヤトモ</small> | ナリ <small>ヤトモ</small> |
| タル <small>カゾナガ ナ</small> | ナル <small>カラベ ンシ</small> |
| タレ <small>バドモ</small> | ナレ <small>バドモ</small> |
| タレ | ナレ |

「ニ」は「なり」の基本語で、中止の場合に用ゐる。「百九十二」を見よ。

一〇二 口語における指定の助動詞は「だ」「です」である。名詞を省いた語に接する場合は、こ
 の上に「の」を冠して「のだ」「のです」といふ。これ等の語の基本は「で」である。「で」に「ある」
 「す」がついて出来たので、「だ」は下の「る」が落ちて出来たのである。中止叙述の場合は基本の
 「で」だけで、下についたものが皆落ちてしまふ。

| | | | | | | |
|----|-------|-------|-------|-------|---|---|
| だ | ダラ(ウ) | ダッ(タ) | ダ(ヨ) | ダ(ト) | ○ | ○ |
| です | デセ(ウ) | デシ(タ) | デス(ネ) | デス(ト) | ○ | ○ |

『註一』である「の」「で」を指定助動詞の中止とし、下の「ある」を動詞と見る説と「である」全體を指定の助
 動詞にする説とある。』

『註二』「ナラ」「ナン」といふ語は「ニ」を基本として「アリ」に結びついたのである。終止形の「ナ」は室町
 時代に用ゐられたが、今は關西の方言として残つてゐる。終止形の失せた残を助動詞として取扱ふ説と助詞
 とする説と「だ」「です」に入れて「しよ」に取扱ふ説とある。』

風の便りに聞いたやうな。(狂言 宗論)

右は標準語では「やうだ」といふ。指定の助動詞の「だ」は「やう」「さう」といふ名詞の下に結び
 つくことが多い。

| | | | | | |
|---|----|---|---|----|---|
| ○ | ナニ | ○ | ナ | ナラ | ○ |
|---|----|---|---|----|---|

と活用する。

一〇 比況の助動詞

歲月矢の如し。
漕ぎゆく舟の跡なきがごとし。

103 右の「ごとし」は助詞「の」「が」を介して、名詞又は活用言の名詞性のものに結びついて比況の意義を以て、叙述を創造するもので、之を比況の助動詞といふ。但し「の」「が」を介せず直に接することもある。古くは「ごと」として用ゐられた語である。今日九州に方言として残つてゐる。

『註 名詞及び名詞性の語は叙述性能を有しないものである。それが「なり」「たり」「如し」によつて述語となるのであるから、叙述を創造するといつたのである。』

104 比況の助動詞は已然形をもたない。上古の形容詞に似てゐる。「なり」には連用形からも連體形からもつづく。「如く(アル)なり」「如き(モノ)なり」兩方とも正しい用法である。

| | | | | | |
|-----|--------|------------------|---------------|----------------|---|
| いとし | ゴトク(ズ) | ゴトク(シトモ) (ナリ) | ゴトシ(ト) (ヤ) | ゴトキ(カ) (ナリ) | ○ |
|-----|--------|------------------|---------------|----------------|---|

『註 口語では比況の助動詞がなくて、そのかはり「のやう」といふのが指定の助動詞と結びついてあらはす。「の」は助詞、「やう」は名詞であると説く人もある。』

第二篇 活用言の連続

第一章 連續系統

105 活用言の連続に四種の系統がある。

- 一、未然形系統の語は 受身使役打消未來の助動詞で、これは動詞及び他の助動詞の未然形に結びつく。
- 二、連用形系統の語は「ん」「り」を除いたところの時の助動詞と希望の「たし」と動詞から轉じた敬語の助動詞とで、動詞及び助動詞の連用形に連続する。
- 三、終止形系統、推量の助動詞全部と詠歎の「なり」とは動詞・助動詞の終止形に連続する。
- 四、連體形系統、指定の「なり」と比況とは動詞・助動詞・形容詞の連體形に直接に又は助詞を介して結びつく。

「まほし」「り」「まさ」は次の表を見よ。

| 語 | 口 | |
|-------------------|--|-----|
| まい (四段活用以外に限る) | れる られる (受身) せる させる (使役) ん ない (打消) う よう (未来) | 未然系 |
| | たい(時) たい(希望) ます なさる 下さる になる ます いたす (敬語) | 連用系 |
| まい (四段活用に限る) | らしい だらう (推量) でせう | 終止系 |
| | のだ のである (指定) のです | 連體系 |

| 語 | 文 | |
|--------------|---|-----|
| り (サ變に限る) | る (受身) らす (使役) さす しむ す ざり (打消) じ む まし (未来) まほし (希望) | 未然系 |
| 候 侍 ふり | たり ぬ つ き けり けむ たし (希望) 給 ふ おは す 奉 る き こゆ (敬語) | 連用系 |
| | らむ べし べかり めり まじ なり (咏嘆) 以上 ラ變に限 つて連 體形に | 終止系 |
| | なり (指定) ごとし (比況) なりは體言 にもつづく。 | 連體系 |
| | り (四段活用に限る) | 已然系 |

第二章 連續の演習

一〇六

演習一 心なき身にもあはれは知られけり。

右の文につき活用言の種類(助動詞は特別に種類をも、動詞、形容詞は活用の種類をも)と連続とを説明せよ。

【解答】

| | | | | | |
|-----|----|----|----|----|----|
| 心なき | 形 | 久活 | 四段 | 助動 | 助動 |
| 身にも | 助動 | 自發 | 四段 | 助動 | 助動 |
| あはれ | 助動 | 自發 | 四段 | 助動 | 助動 |
| 知ら | 助動 | 自發 | 四段 | 助動 | 助動 |
| れ | 助動 | 自發 | 四段 | 助動 | 助動 |
| けり | 助動 | 自發 | 四段 | 助動 | 助動 |

【説明】 右の「れ」は受身から轉じた自發の助動詞で未然連用は同形であるけれども、「けり」は連用を受ける系統の語であるから、「れ」を連用形と決定する。

一〇七

演習二 雉子も鳴かずば打たれまい。

【解答】

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 鳴か | 動 | 四段 | 助動 | 助動 |
| ずば | 助動 | 特別 | 助動 | 助動 |
| 打た | 動 | 四段 | 助動 | 助動 |
| れ | 助動 | 受身 | 助動 | 助動 |
| まい | 助動 | 特別 | 助動 | 助動 |

【説明】 「ず」は未然・連用・終止が同形であるけれども、「ば」のつづくのは未然か已然かである。それ故に未然と定める。「まい」は四段の外は未然形につく。「來まい」「しまい」「起きまい」「見まい」「消えまい」等。

【参考】 甲(一五)の(5) 丙一の(二二) (二三) 丙四の(一〇) 同(一九) 同(三十一) (二)

一〇八

演習三 心かなはずとも怒るべからず。

【解答】

| | | | | |
|-----|----|--------|----|----|
| かなは | 動 | 四段 | 助動 | 助動 |
| ずとも | 助動 | 特別 | 助動 | 助動 |
| 怒る | 動 | 四段 | 助動 | 助動 |
| べから | 助動 | 推量(當然) | 助動 | 助動 |
| ず | 助動 | 特別 | 助動 | 助動 |

【説明】 「ず」を連用と決定したのは「とも」につづくからである。動詞なら「とも」は終止につ

づき、形容詞には連用形につく。「怒る」は終止・連體が同形であるけれども、「べからず」は終止(ラ變は連體)につくからである。

【参考】 甲(34) 乙三(6)(ロ) (17)(イ) 丙一(26)の(2) 丙四(10)(イ) (以上ともニツイテ)

甲(6) 丙一(17)(ハ) 同(21) 丙四(16)(ロ) (17) (以上べし・べかすニツイテ)

一〇九

演習四 餘りに事に甚しく物にせらになれば、行はれぬのみかうとまれぬべし。

【解答】

| | | | | | | | |
|-----|----|----|-----------|----------|-----|-----------|----------------|
| 形 | 動 | 動 | 助動 | 助動 | 動 | 助動 | 助動 |
| 志久 | 四段 | 四段 | 可能 下二段 | 打消 特別 | 四段 | 受身 下二段 | 助動 完了 ナ變 |
| 甚しく | なれ | 行は | れ | ぬ | うとま | れ | ぬ |
| 連用 | 已然 | 未然 | 未然 | 連體 | 未然 | 連用 | 終止 |
| | | | | | | 終止 | 終止 |

【説明】 「行はれぬ」の「れ」は打消につづくから未然形。「うとまれぬべし」の「ぬ」は「べし」がつづくから終止形である。

【参考】 甲(13) 乙一(13) 乙二(16) 丙一(24)

一一〇

演習五 もはや調べさせる暇はないらしい。

【解答】

| | | | |
|----|-----|-----|------------|
| 動詞 | 助動詞 | 助動詞 | 助動詞 |
| 使役 | 下二段 | 久活 | 推量 准志久活 |
| 調べ | させる | 暇は | ない |
| 未然 | 連體 | 終止 | 終止 |

【説明】 「調べ」は未然・連用が同形であるけれども、使役に接するのは未然形である。「させる」は終止・連體が同形であるが、下に名詞があるから、連體形。「ない」も同様下に推量の「らしい」が來てゐるから、終止形である。

【注意】 一、口語であるからそのつもりで活用形を記すこと。

二、「らしい」は「らしけれ」といはない。「らしいから」「らしいので」とつて、「らしけれ」の代りをする。已然形を缺いてゐるから准志久活といふ。

第三章 連續の特例

一、未然形系統に屬する特例

一〇一 受身の助動詞は動詞及び使役の助動詞の未然形を受けるのである。

『註 助動詞ではたゞ使役につゞくだけで、ほかの助動詞にはすべて「る」「らる」が接しない。』
右のうち四段と四段別格とからは「る」がつづき、其他からは「らる」がつづく。

例 打たる 死なる 居らる

報いらる 棄てらる 見らる

蹴らる 來らる 罪せらる

一〇二 サ變に起る受身の特例。「さる」。

「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 罪サル

評サル

解釋サル

これは受身「ラル」につづくのに、サ變の語尾「セ」をうけて

罪セラル 評セラル 解釋セラル

といふのを本則とし、セ・ラの約音「サ」となつて、「サル」といふのをこれまで長く誤謬として取扱つてゐたのを許容したのである。(文法上許容ニ關スル事項六)

『註 文法上許容事項とは文部省に於て國語調査委員會に諮問した結果、これまで破格又は誤謬として居つた語法十六箇條を許容し、教科書檢定又は編纂の場合にも、この語法で差支がない旨を明にした事柄をいふ。』

一〇三 口語受身の助動詞も「れる」が四段につき、「られる」が、他の動詞からつく。

例 知られる 棄てられる 報いられる

見られる 來られる 罰せられる

一〇四 口語に於ても 文語のやうに、

罪セラレル 罪サレル

批評セラレル 批評サレル

「セラ」が詰つて「サ」となること右の例でわかる。しかし「四十三」節(三十頁)で述べた通り、

漢語又は國語の名詞を動詞として用ゐる場合に、サ變の外にサ行上一段ともなり、この中には達・察・命・信・感・鬱・案・封・御覽のやうに約音にならぬのがあつて、「達セラレル」「案ジラレル」といふ。そこで次の三つの型ができる。

- (一) サレル型 罪サレル 評サレル
- (二) セラレル型 命セラレル 御覽セラレル (連濁で「セ」が濁ることもある)
- (三) シラレル型 感ジラレル 案ジラレル (連濁で「シ」が濁ることもある)

右の(一)は所により人によつて變りがないが、(二)と(三)とは區々である。今日京都の「シラレル」大阪の「セラレル」のやうなもので、どつちかへ一定したいものである。

【一五】使役の助動詞は、動詞の未然形を受けるのである。その中「しむ」はすべての動詞につき、又助動詞の受身・打消「ざり」推量(べから)指定(なりたり)からもつとく。「す」は四段と四段別格とからその未然形に接し、「さす」はその他の動詞の未然形に連続するのである。

- 例 鳴かす 死なす 居らす 捨てさす 報いさす 見さす
- 蹴さす 來さす 周旋せさす

【一六】サ變に起る使役の特例。その一「さす」。

「、セサス」タイプベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 手習サス

周旋サス

賣買サス (文法上許容ノ五)

これは「周旋せ」といふ未然形に「さす」がついて「せさす」となる。その「せ」を略したのである。受身の場合に「せらる」が「さる」になるのと似てゐる。

【一七】口語の使役助動詞も四段からは「セル」、その他からは「サセル」がつく。

- 例 喚かせる 見させる 蹴させる 起きさせる
- 棄てさせる 來させる 達しさせる

口語におけるサ變も文語と同じく「し」を略する語がある。

例 勉強させる 入學させる 掃除させる

但し「發す」「罰す」「封す」「談す」等は「し」「じ」を省くことが出来ぬ。

【註】「サセル」はサ變の未然形の「シ」の方からついて、「セ」の方からつかない。「達シサセル」「論ジサセル」といふが、「達セサセル」「論セサセル」とはいはない。受身「ラレル」に比して簡單である。』

一一八

サ變に起る使役の特例。その二。「得せしむ」。

「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

(文許七)

得は「エ」「ウ」と活用する、その未然形「エ」から使役助動詞「シム」につづいたのであるから、「エシム」を本則とする。

最優等者 褒賞 を得 (通常相)

これを使役相にするには前の主語が補語となつて別に主語が這入るわけである。

會長 最優等者に 褒賞を 得しむ (使役相)

「セ」の混入する餘地が無い。一體この「セ」は何物で、どうしては入つて來たかといふに、類推作りに基いたのである。サ行下二段に「見ス」「著ス」「似ス」といふ語がある。それ等を使役相にする時には

見セシム 著セシム 似セシム

等「セシム」となる。それを一音の動詞、得・經・射に類推し、使役相にする時に誤つて

得セシム 經セシム 射セシム

といふやうになつた。「セ」は語尾でもないし、又助動詞の一部分でもない。しかし「得セシム」に限つて許容されたのである。「經セシム」の方はまだ誤謬として取扱ふ。「似セシム」「射セシム」も誤である。

二、連用形系統に屬する特例

一一九

過去時の連続、その一。

カ變に對しては 過去の キ・シ・シカは

來^カし^シか 來^カし^シか

のやうに未然形と連用形と兩方から、シ・シカがつゞいていづれも正しい。元來連用形からつゞくのは過去の助動詞の本則である。ところが未然形にもつく。つき方が一つ増加したのである。そのうめ合はせに、カ變から終止形のキが絶対に續かない。

人 來^カき。 (これは言へな^ス)

人 來りき。(動詞を四段活にかへて云ふ。)

110 過去時の連続、その二。

サ變に對しては連用形に接するのはキだけである。

今朝は 五時に起きて 勉強しき

シ・シカは未然形について、連用形系統の語でありながら、連用形につかないのである。

勉強せ(し)時
しかば

111 過去時の連続その三。「せし」「せしか」。

四段に對しては 文法許容事項の八に、

佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ、シカ」に連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場
合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

【説明】 時ノ過去「キ・シ・シカ」と活用する助動詞は、動詞の連用形からつく。



以上の如く「シシ・シシカ」は本則である。何故に「セシ・セシカ」が生じたかといふに類推作用の結果である。サ變では右の通り未然形につく特例がある。そして「セシ・セシカ」といふ。それ故サ變では「シシ・シシカ」は誤である。それが四段の場合と混じたのである。「シ・シカ」につづく場合は、要するに、

- | | | |
|-------|----------|-----------|
| サ行四段は | 話シシ (本則) | 話セシ (許容) |
| サ變は | 説明シシ (誤) | 説明セシ (本則) |
| サ下二は | 馳シシ (誤) | 馳セシ (本則) |

「シシ」は四段だけが正しくて他は誤。「セシ」は四段は許容で、サ變・サ下二ともに正しい。結局「セシ」は許容か正かで誤がないことになる。次のうちで正・許容・誤をつけて見よ。

例 獻(じ)し正 (理由サ變)。

| | | | | | |
|------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| 盡 <small>ツク</small> 〔せしし〕 | 合格 <small>カク</small> 〔せしし〕 | 及 <small>ツキ</small> 〔せしし〕 | 費 <small>ツク</small> 〔せしし〕 | 盡力 <small>ツク</small> 〔せしし〕 | 早起 <small>ハヤ</small> 〔せしし〕 |
| 申 <small>マウ</small> 〔せしし〕 | 押 <small>オシ</small> 〔せしし〕 | 移住 <small>ウツル</small> 〔せしし〕 | 醒 <small>ツク</small> 〔せしし〕 | 出 <small>デ</small> 〔せしし〕 | 遠足 <small>トウソク</small> 〔せしし〕 |

乙三(一)を見よ。

一三三 カ變・サ變の禁止用法。禁止の助詞「な・そ」の中には動詞連用形が入る規則で、連用形系統に属するのであるが、これも特例がある。

例へば「春な忘れそ」「な怠りそ」の「忘れ」「怠り」は連用形である。カ變・サ變に限り、左の如く未然形が入り込むのである。

な來コそ な爲セそ

一三三 口語の未來の助動詞「よう」もカ變からつゞくときに

來コよう 來コよう

のやうに兩方からで、いづれも正しい。サ變は「しよう」一つである。序に附け加へて置く。

三、終止形系統に属する破格

一三四 推量の助動詞は動詞の終止形につく。ラ變の動詞に限つて連體形につく。「まじ」も終止形系統に属する語である。然るに打消の意味を含むところから、打消の連続の未然形と混じて、未然形系統に變る破格ができたのである。

ものうらやみはせまじきことなりとか (宇治拾遺一鬼にこぶ取らるゝこと)

君もしろしめされまじう (平家物語二西光斬られのこと)

福原の新都へのほらうに三日にすぎまじ (平家 伊豆院宣のこと)

せまじきものは宮仕 (菅原傳授手習鑑、松王丸の述懐)

かういふ語法の破格から「下されまじく候」となつた。これは誤である。

終止形からつけるのが正しい。「すまじきもの」「しろしめさるまじう」「すぐまじ」とすべきである。

一三五 口語「マイ」の受け方。四段は終止形、他は未然形につく。

例 咲クマイ (四段) 消エマイ (下二)

見マイ (上一) 來マイ (加變)

爲マイ 又 爲マイ (佐變) 兩方とも正しい。

一二六 「べし」「べからず」「らん」接續は終止形系統に屬する。ラ變は連體形であるが、その他の動詞の連體形からつゞけたり、未然形からつゞけてはならぬ。

例 捨てべからず 捨つるべからず

消ゆるらん 消えらん 消えべし

右は皆誤である。「捨つべからず」「消ゆるらん」とするのが正しい。

第三篇 正 誤

第一章 假名の誤をしないこと

一二七 送假名を誤らないこと。

通則として語尾の活用するのに送る。「行かず」「定むること」「定まりて」又「定りて」「ま」を送るのは「定む」の「む」と聯絡をとつたのである。又「降積もる」等熟語となつたとき上の動詞の語尾には、特別に擬れる場合の外は、送らないきまりである。

演習一 次の文に誤あらば正せ。(慣例のあるのは慣例に従つて改めよ)

- 一 近頃は毎日雨の降ぬ日が無い。
- 二 無用の者入べからず。
- 三 昔々或る所に爺と婆があつたとさ。
- 四 明ましておめでたう。
- 五 恭しく新春を賀し奉り候らふ。

- 六 バラ／＼と栗の實が落ちて来ました。
- 七 御光來の折は電話で御知らせ下さい。
- 八 昨日お友達から「坊ちゃん」を借て來ましたが、まだ讀みません。
- 九 私が買て参ります。
- 一〇 もう書てしまひましたのよ。

二二八

動詞の語尾の假名遣を誤らないこと。

動詞は既に分つたやうに、五十音圖の或一行だけに活用するのであるから、活用の行が分れば、語尾の假名遣は誤らない。しかし紛れ易いのは一、ア行・ヤ行・ワ行・ハ行に活用するものである。

1 ア行の活用

- (得) え えう うる うれ え (下二段活用)
- (射・鑄) い いゝる いる うれ い (上一段活用)

2 ヤ行の活用

- 老・悔・報 い いゆ ゆる ゆれ い (上二段活用)
- 甘・嗽・癒・覺・魔

3 ワ行の活用

- 思・消・聞・崩・肥 え えゆ ゆる ゆれ え (下二段活用)
- 越・凍・牙・榮・餓
- 聳・絶・斷・潰・萎
- 煮・生・冷・殖・吠
- 見・見・燃・崩・悶

二二九

ハ行の動詞。右の外はハ行である。例へば

- 遭買……………は ひふ ふ へ へ (四段活用)
- 誣強戀……………ひ ひふ ふる ふれ ひ (上二段活用)
- 與憂衰考加
- 答支貯堪湛
- 交仕唱捕迎
- 辨教添……………へ へふ ふる ふれ へ (下二段活用)

右の通上二段はヤ行の三語を記憶しよへすれば、他はハ行である。問題はヤ行下二段を記憶することである。このおほえ方はあとでいふ。

二はザ行ダ行を見わけること。

交・混 ぜぜず ずる ずれ ぜ (ザ行下二段活用)

論・命・變 ぜじず ずる ずれ ぜ (サ行變格活用)

怖・閉・綴・恥・捻 ぢぢづ づる づれ ぢ (ダ行上二段活用)

出・撫・愛・秀・擢 ぢぢづ づる づれ ぢ (ダ行上二段活用)

出・撫・愛・秀・擢 ぢぢづ づる づれ ぢ (ダ行下二段活用)

詣……………で でづ づる づれ で (ダ行下二段活用)

「交(混)ず」を除く外三段に活用するのはザ行、二段はダ行と心得るがよい。

動詞活用の假名遣の三は轉音の或る場合。

湛 たたふ を たとふ と誤り 譬 たとふ を たたふ と誤る。

これは「へて」又は「へば」を下につけるとわかる。試みに 支ふ 厭ふ 控ふ 迎ふ 傳ふ 誘ふ 揃ふ 整ふ 唱ふ の右側に假名をつけて見よ。かういふことは練習に限るから面倒を厭はないで、

演習題をやるがよ。

演習二 左の文中○の箇所 to 適當な假名を埋めよ。

- 一 飢○たる者は食を擇ばず。
- 二 與○るは受くるよりも幸なり。
- 三 今に傳○てなほ美談とす。
- 四 指折り數○れば已に七年の昔となりぬ。
- 五 彼れの斷○る事なき努力は遂に今日の成功を致せるなり。
- 六 應○るものはただ山彦の聲のみなりき。
- 七 終に眠るが如く息絶○ぬ。
- 八 何故に訴へ出でざりしぞと問○給○ど、なほ娘を前に据○たるまま一言もえ答○奉らざりけり。

一三〇 ヤ行下二段のおほえ方。それは「カス」又は「ス」をその語の下につけて見る。

甘ヤかす おびヤかす 聳ヤかす 癒ヤす 消ヤす 肥ヤす 越ヤす 餒ヤす 生ヤす 殖ヤす 燃ヤす

さうするとヤが出る。ヤ行といふことがわかる。この法の利かないのは次の十語である。

嘶 覺 思(おもほゆ) 聞ゆ 凍 榮 吼 見ミユ 見ミ 悶

この記憶法として試みに次の歌をつくつて見た。

まみえしに榮えし昔おもほえて見え聞えにて悶ゆなりけり (この文句で六語を覚える)
犬吠え馬嘶え寒さ凍ゆるかと覺ゆ (これで四語を覚える)

演習三 左の文中○の箇所〇の箇所に適當な假名を埋めよ。

- 一 聞くは易し覺〇るは難し。
- 二 民富みたらば國も自から榮〇べし。
- 三 飢〇たる人に食を與ふ。
- 四 習ひたることを忘るゝは、耻〇べきことなり。
- 五 知りて答〇ること能〇ざるは臆病なり。
- 六 昔、戸を閉〇て勉強したる學者ありき。
- 七 恩を受けなば必報〇よ。
- 八 智者は治に〇て亂を思ふ。

九 稻を植〇るは六月の頃なり。

【参考】 甲の(17)(18)(29)(31)(33)(B) 乙三の(2)(B)(10)

一三二 助動詞等の假名を誤らないこと。

未來の助動詞(口語)「よう」例へば「起きよう」「しよう」「捨てよう」「來よう」又「來よう」等の「よう」を「やう」と書いてはならぬ。「ありさま」「風ふう」といふのは様子の様で、「やう」とかく。

一三三 「行きますせう」「來ませう」を「ましよう」と書いてはならぬ。「でせう」も「でしよう」と書いてはならぬ。みな「ませ」「でせ」といふ未然形に「う」が結びついて出來た語である。又打消の助動詞の「ない」を「無い」と書いてはいけない。存在の打消でない。形式化した廣い意味である。「まづ」(先)といふ副詞を「まず」と書かないやうにすること。(甲の(17)参照)。「教へ」は「をしへ」とかく。(甲の(31)(ハ)(ハ)「降つてゐる」の「る」を「し」と書いてはならぬ。

【参考】

- 乙三(4)(6)(8)(11)(12)(18)(エ)
- 丙四(1)(26)(27)(ハ)(28)(ト)

第二章 音便の書方を誤るな

一三三 音便は發音の便宜のために、原の音から他の音に轉ずるもので、假名も發音の通りに書けばよいのである。用言の音便にはイ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種類がある。ともに活用形の一部が他の音に變るのである。

イ音便

動詞



- 咲きて 花が咲いて居る。
- 仰ぎて 天を仰いで嘆息する。
- 指して 江戸を指いて行く。
- ござります ございます。

形容詞

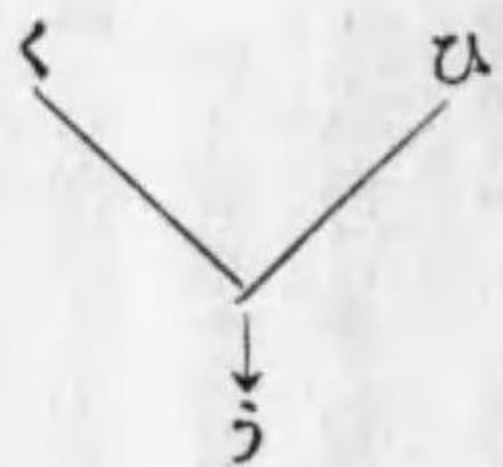
悲しき あゝ悲しい哉。

右のやうに「き」「ぎ」「し」「り」の音が「い」の音に變るのをイ音便といふ。この場合「い」の假

名を「ひ」「ゐ」と書いてはならない。

ウ音便

動詞

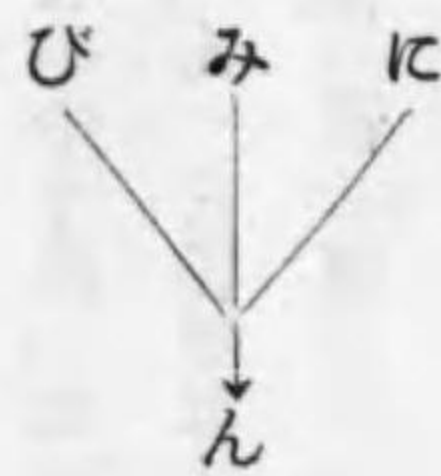


- 買ひて 本を買って来た。
- 問ひて 先生に問うてみる。
- 形容詞
- 涼しく 大分涼しくなつた。
- 嬉しくて 嬉しうてたまらぬ。

右のやうに「ひ」「く」の音が「う」の音に變るのをウ音便といふ。この場合「う」の假名を「ふ」と書いてはならない。

撥音便

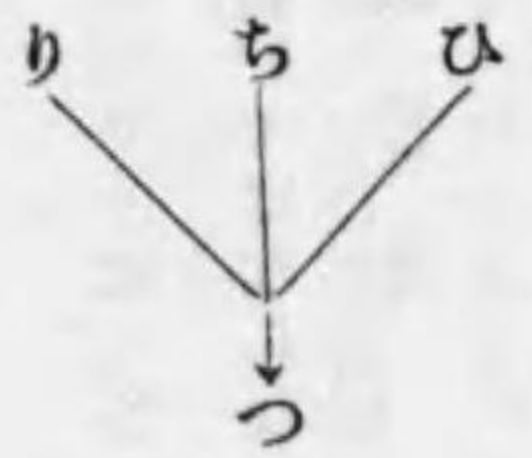
動詞



- 死にて 彼死んでその跡絶えたり。
- 富みて 家富んで禮節を知る。
- 飛びて 飛んで火に入る夏の虫。

右のやうに「に」「み」「び」の音が「ん」と撥ねる音に變るのを撥音便といふ。この場合は發普通
り「ん」と書けばよい。「む」と書いてはならぬ。

促音便



動詞

- 救ひて 人の難を救つて樂む。
- 討ちて 仇を討つて名を揚ぐ。
- 散りて 花も散つて青葉となる。

このやうに「ひ」「ち」「り」の音が、促つて唱へるのを促音便といふ。促音便は「つ」と書く。

【註】形容詞はウ音便が早く平安初期に發生し、次にイ音便が出來て、今日の口語となつた。動詞の音便は優しいイ音便とウ音便とは平安初期からぼつ／＼發達し、勇ましい促音便・撥音便は大體院政頃から發生して武士の間に多く用ゐられたものである。』

演習一

次の文の誤を正し、その理由を述べよ。

- 一 あゝ悲しむかな。
- 二 口あひて人に食はるゝ石榴かな。

- 三 さうゆう事もあらうと思ふ。
- 四 一寸見てきやうかしら。
- 五 今のは何でしょうか。鼠の悪戯であるふと考えますが。

演習二

次の文の誤を正し、なほその理由を述べよ。

- 一 笑ふて答えず。
- 二 絶へず雨降るは堪えがたし。
- 三 御兩親様おかはりもなふ暮させられ候由何より嬉しふ存じ候。
- 四 赤ひ花もあれば白ひ花もあつて面白ひ眺めであつた。
- 五 田をうへる少女の菅笠が揃ふてゐる。
- 六 おこなうまじきことを行うてきびしく諭されたり。
- 七 もうおそひから門を閉ぢなさい。
- 八 飛むで火に入る夏の蟲。
- 九 首尾よふ卒業されておめでたふございます。
- 一〇 翼くは仰ひで天に聴じざれ。

演習三 同上。

- 一 みんなおいしひおいしひと言つて食べました。
- 二 彼はだまつて澁ひ顔をしていた。
- 三 ただくそののみが悔やしふござります。
- 四 私はほんとに羨ましゆうござりました。
- 五 雪達磨が黒ひ目玉をむき出してゐる前を白い小犬が駆け廻つてゐる。
- 六 その話を聞いてほんとに驚ひた。
- 七 掌中の珠を失ふたる心地して茫然たるばかりなり。
- 八 天を仰ひで長嘆すること久し。
- 九 負ふた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。
- 一〇 そういふ事情なら、此方にも少し考へがある。

【参考】 丙一の(9)を必ず見よ。

甲(22)(33) B 乙三(6)(13)(15)(18) 丙四(27)

第三章 活用を誤るな

一三四

連體形の誤 連體形にいふべきところを終止形にいふ誤がある。文語二段活用に多い。

出で迎ふ人停車場に満ちたり 丙四(28)の(へ)

新年を迎ふと共に一年の計を立つを忘るべからず 同(33)

等はこの例である。

一三五

口語を文語文につかはないこと。

早く起きる人は多くは早く寝ぬる人なり 乙三の(3)

たとひ一度失敗したりとも初志を棄てること勿れ 同(15)

等はこの例にあたる。【参考】 丙四の(8)(イ)

一三六

未然形と已然形とを誤らないこと。上に「たとひ」「もし」といふ假定の副詞があらば、必ず未然形を用ゐるがよい。又「明日」「今後」といふ副詞がある場合も同じことである。口語ではこの區別がなくなつてゐるから、とかく文語に於てこの誤をすることが多い。

若し食盡くれば砂を嚙むでも進まむ 丙四の(31)

明日若し天氣あしければ遠足は順延と心えるべし 同(11)

【参考】

- 乙三(5)(7)(ハ)(12)(イ)(15)(ロ)
- 丙四(2)(ニ)(6)(ハ)(7)(イ)
- (14)(三)(17)(イ)

第四章 呼 應

一三七 自動他動の呼應。「三十四」節「三十五」節を見よ。乙三(14)(20) 丙四(19)

一三八 時の呼應。上に將來といつて下に過去の助動詞をつかつてるるやうなのは時の呼應を誤つた例である。(乙三(9)の(4))

一三九 反語の呼應。連體形で應ずる。そこで

是にもいかで劣るべし 丙四(23)(ホ)
は誤である。又

豈に昭代の一大盛事なり (ならずや)

いかで學業を廢す (廢すべけんや)

誰れか父母なし (なからん)

右は皆誤で括弧内のやうに云ふべきである。

一四〇 特殊の呼應。

恨むらくは……………ことを。

恐らくは……………ことを。
この世は 糞くは……………ことを。
 宜しく……………べし。
 すべからく……………べし。
 當に……………べし。
 將に……………とす。
 況や……………をや(に於てをや)。
 宜なるかな……………こと……………や。
 豈はからんや……………とは。
 はからざりき……………とは。
 思ひきや……………とは。
 決して油断すべからず。
 ゆめ油断すな。
 或は……………ん。

蓋し……………なるべし 又 ん。
 必ずしも……………に非ず。
 何となれば……………ればなり。

試みに左の文を吟味して見よ。

豈圖らんや今日君と相會することを得たり。(乙三(15))

思ひきや雪ふみわけて君を見たり。

圖らざりき深く自ら決する所ありたり。(丙四(5))

第五章 語の連續 (その一)

一四一 時の助動詞「り」の連續。四段の已然形・サ變の未然形以外にはつづかない。下二段からつづけて誤ることがある。「受けり」「寄せり」「捨てり」「霽れり」「衰へり」は皆誤ゆゑ、「たり」を用ゐるがよい。

一四二 禁止の「な」。終止形からつづく。「勿れ」は連體形からつづく。混じて「な」を連體形からつづけるな。但しラ變は連體形につく。

汝過すな。

御油斷あるな。

一四三 完了の「ぬ」はナ變からつづかない。

死にぬ。

去にぬ。

は誤である。「たり」を用ゐよ。

一四四 「まじ」「べし」「べからず」「らん」「めり」「らし」等推量の助動詞は、

動詞・助動詞の終止形 例 知らしむべからず。

ラ變系には連體形 例 友なるべし。

これ以外の連續は誤と知れ。

一四五 「ごとし」に「ごとけれ」といふ已然形が無い。「如くなれ」をつかふのである。

一四六 指定の「なり」を終止形からつづけてはならぬ。必ず連體形からつづけよ。

一四七 文法上の許容事項。

| 事 | 項 | 本 | 則 | 許 | 容 | 用 | 例 |
|-----|---|--------|---|----|----------|--------------------------|---|
| 居り | 1 | ラ變 | | 四段 | | 友と二人こゝに居る。 | |
| 恨む | 1 | 上二段 | | 四段 | | 恨まん、恨ます。 | |
| 死ぬ | 1 | ナ變 | | 四段 | | 死ぬ命、死ねど、死ねば。 | |
| 志久活 | 2 | 終止形 | | | 「シ」を添へる | 「惡し」を「あしし」、「勇まし」を「勇ましし」。 | |
| 過去 | 3 | 終止形「キ」 | | | 「シ」で終止する | 鎮火せざりし。 | |
| 異なり | 4 | 形容動詞 | | | 用法擴張 | 「異なれり」「異なりて」、「異なりたり」を許す。 | |

| | | | | |
|---------|----|----------------|------------|-------------------------------------|
| サ變使役 | 5 | せさす | さす | 周旋さす、掃除さす。 |
| サ變受身 | 6 | せらる | さる | 批評さる、尊敬さる。 |
| 一音動詞の使役 | 7 | 「せ」を入れぬ | 「せ」を入れる | 「得せしむ」許容、他は誤とする。 |
| 佐行四段と過去 | 8 | シシ | セシ | 暮せし、過せしかば。 |
| 助詞の | 9 | 連體形の下に不要 | 連體形の下につかふ | 就學せしむるの義務。 |
| 同 疑ノヤ | 10 | 終止形につく | 連體形につく | 有るや、なきや、似たるや。 |
| 同 とも | 11 | 動詞と使役受身の終止形 | 同上連體形 | 經るとも、批評せらるゝとも、 はるるといふ、 ひけるとぞ。 |
| 同 と | 12 | 同右及時の終止形につく | 同上の連體形につく | 月出づると見て、取扱はしむるとき。 |
| 同 列舉ノト | 13 | 最終の語句の下にも置く | 誤解なき時省く | 宗教と道德の關係。 |
| 同 疑ノヤ | 14 | 疑の語の下には「か」を用ふ。 | 「や」も許容す | 誰にや問はん、いかにすべきや。 |
| 同 も | 15 | とも、ども | 誤解なき時にもを用ふ | 何等の事由あるも、入ることを許さず。 |
| 指定なる | 16 | といふ(名詞の下) | なる | 顔回なるものあり |

左に本文を掲げ置く。

一四八 文法上許容に關する事項

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アツシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ

五、「セ、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 罪サル

評サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地方ニ安ズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ニ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例 花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例 有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

一一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

一二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ

嘲弄セラルルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

一三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

一四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてには「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例 誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

一五、てには「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ケルモ妨ナシ

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ) 議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ) 準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ「シカドモ」昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

諸願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ) 應募者ハ多カルベシ

一六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ケル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例 イハユル哺乳獸ナルモノ

顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セララルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ専ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

(明治三十八年十二月二日文部省告示第百五十八號)

演習一 次の文に誤あらば正し、その理由を説明せよ。

(1) 任重くして負擔に堪へざるが如けれども、決して然らず。

- (2) 年老いて氣力大に衰へり。
- (3) 無用の事には關係せまじきものなり。
- (4) 重要な事件は他人に任せまじきものなり。
- (5) 樹木を植ゑべからず
- (6) 峰の老松幾代經るらん。
- (7) 苦心の功速に顯れり。
- (8) われも君と共に行かんと欲すなり。
- (9) それにては未だ成功せりとは言はれまじ。
- (10) 與一に命じて扇の的を射せしむ。

演習二

次の文に誤あらば正すべし。もし許容事項に觸るるものあらば指示し、本則の用法をも併せ示すべし。

- (1) 文部大臣の出張されしは昨日なりし。
- (2) 身體に害を及ぼせしは過度に勉強しし故なり。
- (3) 試験に及第せしを以て入學を許可されたり。

【参考】

- 甲(15)
- 乙三(1)(2)(3)(ロ)
- (6)(ロ)(20)(ロ)
- 丙四(8)(9)(イ)
- (10)(イ)(15)(ハ)(ニ)(16)(19)(30)(31)

(4) 今日先生の出だせし問題は甚だ解し易かりし。

(5) 直に事情を警察署に訴へさしたり。

第六章 語の連続 (その二)

一四九 助詞の連続。上の語に連続する關係から見て助詞を次の通り三大別するのである。(上は文語、下は口語。)

| | | |
|-----|----------|---------|
| 名詞に | がのつ (古語) | がのをと |
| つく助 | をにとへ | へよりからまで |
| 詞 | よりからまでにて | で |

右は名詞について他の語との關係を示す助詞で省くこともあるが、大體は省くと片言になるのである。

一五〇 これを假りに第一類とする。この中で文法上の許容事項に關係あるのは、右側に○を附した「の」「と」二語である。

「の」は名詞と名詞とを結びつける助詞である。文法上許容事項の九の「花を見るの記」「學齡兒童を就學せしむの義務」をもと誤としたのは、連體形からすぐ名詞へつゞけてよい。その間に「の」を置く必要を認めないといふのである。ところが「の」の上全體を一つの名詞と見ることは差支がない。さう見れば「の」の用法に少しも故障がない。

一五一 「と」許容十二と十三にある。名詞について語句を重ねる用法の助詞である。列擧の「と」とよぶ。

語句を列擧する場合に用ひる「てにをは」の「ト」は誤解を生ぜざるときに限り最終の語句の下に之を省くも妨なし。

例

月と花

宗教と道德の關係

京都と神戸と長崎へ行く

最終の「ト」を省くときは誤解を生ずべき例

史記と漢書との列傳を読むべし

史記と漢書の列傳とを読むべし

【説明】 漢文ではこの「と」には「與」の字を充てゝゐる。和歌は用語に限があるから、下の「と」を略する。それから對偶的に並べる場合にも「月と日 月と星 日と星 朝と夕」といふ風に「と」を一つ略する外には室町時代の末まで文章では略しなかつたのが、江戸時代から略する習慣が出来たのである。

(イ) 日曜日と祭日の翌日はやすむ。

(ロ) 日曜日と祭日の翌日はやすむ。

(ハ) 日曜日と祭日との翌日はやすむ。

下に「ノ何」が来ると誤解ができる。(イ)は(ロ)の意にも又(ハ)の意にもなる。

一五二 列擧の「と」は連體形を受ける。

人と禽獸との差は言語を有する^(ゴト)と有せざる^(コト)によりて別ると或人はいへり。

手を擧^(コト)ぐると同時に足を出すべし。

連體形は名詞性であるから、上全體を一つの名詞と見ること、「の」の場合と同じである。

一五三 「受け留め」の「と」が上の文全體を名詞と見て受けるので同じ「と」である。文に係結があると、結がすんでから受けて下へ結の力が及ばない。受と留めて了ふのである。

貧家に生れたるこそ幸福なれと古人もいへり。

普通の文は終止形からこの「と」で受け留められる。連體形から受け留められるのを従來誤謬としてゐた。それを許容したのが第十二項である。

「てにをは」の「ト」の動詞・使役の助動詞・受身の助動詞・及时的助動詞の連體言に連続する習慣あるものは之に従ふも妨なし。

例

月出づると見えて

嘲弄せらるゝと思ひて

終日業務を取扱はしむるといふ

萬人皆其徳を稱へけるとぞ

【説明】 形容詞や形容詞的活用の助動詞「べし」「ごとし」「まじ」其他の助動詞「ず」「なり」「たり」(指定)などは勿論終止形からつゞけること。時の助動詞が許容の範囲内に入つてゐることを説いて置く。

第一類の助詞はこの他には語の連続上問題になるのが無い。「の」「と」の二つは文を名詞と見てそ

れを受ける點で問題になつたのである。助詞に關する説明は品詞篇とする。

【参考】 丙一(28)

一五四

種々の語につく助詞。第二類の助詞ともいふ。

| 文 | 口 |
|--------------|-------------------------------|
| はもぞなんこそ | ハモコソサヘデモバカリ |
| やか(禁止) | ダケキリ(ギリ)ホカシカホド |
| だにすらさへ | クラキ |
| のみばかり | ナナラナリヤラ |
| やな(咏)をしよかなかし | ナ(この四つは終止形がなくなつて新に助詞に編入されたもの) |
| | エサセトモモノ(文の中又末ニアツテロ調ヲ整フ) |
| | エサセトモモノ(文ノ末ニアルモノ) |

『註一、口語助詞に「ナ」「ナリ」「ナラ」を置いたのは「六十」「百二」の一説として別にした説明である。もと文語指定助動詞や形容動詞の語尾であつたのが、終止形を失つて助詞になつたのである。主として副詞につき又、形容詞の語幹や「さう」「やう」(形式名詞)にもつく。例 静かな住居ならよい。「なら」「なり」は名詞・動詞・形容詞にもつく。

註二、助動詞は活用が退化しても終止形さへあれば、助動詞である。「ウ」「ヨウ」「マイ」「ダラウ」「アセウ」は之に當る。終止形が無くなると、もはや助動詞たり得ないで助詞になる。こんな説もある。

註三、問題になるのは、「な」「や」「か」(連続の上で)、「だに」「すら」「さへ」「(意義用法の上で)」、「この二組である。』

一五五

「や」は名詞にもつくが、動詞形容詞にもつく。活用言につくときは終止形である。

わが思ふ人ありや、やなしやと

ところが終止形と連體形と鎌倉時代から同一になる傾が生じ、連體形からつくことを許容したのが第十項である。

一五六

疑の詞の下に「や」を用ゐる許容。(第十四項)。

上に疑の語あるときに下に疑の「てにをは」の「ヤ」を置くも妨なし。

例

誰にや問はん 幾何なるや

如何なる故にや 如何にすべきや

【説明】 疑の詞の下には「か」を用ゐて「や」をつかはない。これは中古語法の正しい格である。

和歌は今日でもこの通りである。「たれをかも知る人にせん」といつて「誰をやも」とはいはない。ところが鎌倉時代から物語等に見えてをて、慣用が久しいから許容したのである。「紳士とはいかなる人をいふや。」これは疑の詞の下に「や」をつかつた許容(一四)と連體形から「や」につづいた許容(十)と二事項が含まれてゐることになる。

一五七 活用言につく助詞。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|-----------------------------------|--|------|
| 文 | 未然形に | 連用形に | 終止形に | 連體形に | 已然形に | 命令形に |
| 語 | ば [○] で [○] なん ば [○] や な(古語) ね(古語) | て [○] がな(てしがな) ながら(以上動詞に) てともと(古語) もが(以上形容詞に) にて(如しに) | とも と(古語) (以上動詞に) ながら (形容詞志) 久活に) | が を に も もの を から | ば [○] ど [○] ども | よ |

| | | | | | |
|---|------|---|--|------|-------|
| 口 | 未然形ニ | 連用形ニ | 終止形連體形ニ | 已然形ニ | 命令形ニ |
| 語 | ○ | テ テモ(用言に) ナガラ(動詞) ナ(勸誘) モハ(形容詞に) | トカ カラ ノデ ノニガ トコロガ ケレドモ シナ(禁止) | バ | イ ロ ヨ |

【註一、○を右傍につけたのは、問題にでる語である。

註二、禁止の「ナ」は動詞にだけつく。文語の「な」は名詞にもつくから、第二類に入れた。

註三、「なん」「ばや」「がな」「もが」は願望の意をあらはす。これは感動詞に入れてゐる説もある。助詞として取扱ふ人は第二類に入れる。本書は斷然第三類に入れた。】

一五八 「とも」の連続。許容第十一項に、「てにをは」の「トモ」の動詞、使役の助動詞及受身の

助動詞の連體言に連続する習慣あるものは之に従ふも妨なし。

例

數百年を経るとも

如何に批評せらるゝとも
強ひて之を遵奉せしむるとも

【説明】 特に動詞使役受身の助動詞と限つたところに注意を要する。形容詞や形容詞的活用の助動詞「ず」「べし」「まじ」「たし」には連用形につく。指定「なり」「たり」の場合は終止形につく。時の助動詞の事は何ともいつてゐないから終止形につく。

かうなつた経路は「タトヒ數百年ヲ經ルコトアリトモ」「如何ニ批評セラルルコトアリトモ」「強ヒテ之ヲ遵奉セシムルコトナリトモ」の——が省かれたのである。

一五九 「とも」「ども」の用法。假定のときは「とも」を用ゐ、既定の場合は「ども」を用ゐる。「もし」「萬一」「明日」等の下に「ども」をつかつてはならぬ。

一六〇 「も」許容第十五項に、「てにをは」の「モ」は誤解を生ぜざる限りに於て「トモ」或は「ドモ」の如く用ゐるも妨なし。

例

何等の事由あるも（アリトモ）議場に入ること許さず

期限は今日に迫りたるも（タレドモ）準備は未だ成らず

経過は頗る良好なりしも（シカドモ）昨日より聊か疲労の状あり

誤解を生ずべき例

請願書は會議に付するも（ストモ）之を朗讀せず

給金は低きも（クレドモ）應募者は多かるべし

一六一 「ばかり」の受け方。中古では終止形を受けたが、連體形を受けるのを正しいとする。

一六二 「のみ」「だに」「すら」「さへ」「まで」活用言に接する時は名詞性の場合、即ち連體形からである。

一六三 「が」「に」「を」は連體形につく。

一六四 文語だに「セメテナリト」「ダケガ」の意。すらデモヤハリの意。「だに」をこの意にもつかふ。さへ「マデモ」の意につかふ。百九十六節参照。

演習一 左の文中の誤を正し、且理由を述べよ。許容されたのはそのよしをいへ。

一 今は留むるとも留まらじ。

- 二 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。
- 三 敵多しとも恐るるな。
- 四 後にて悔ゆるな。
- 五 主人なしとて春な忘れぞ。

演習二

次の文に誤があるなら正せ。

- 一 彼は日の出づるより日の没すまで蓄財に汲々たり。
- 二 この度の試験にさへ及第せば、何事も憂ふるに足らず。
- 三 人の一生は重荷を負うて坂を攀づが如し。
- 四 汝の隣人を愛せよ。決して悪に報ゆに悪を以てすること勿れ。
- 五 今度の作文は、「墨堤に花を賞すの記」といふ題だ。

演習三

次の文に誤があるなら正せ。

- 一 明日雨降れども彼は歸國すべし。
- 二 今夕御都合宜しければ御訪問申し上げべく候。
- 三 天氣は決して心配なくとも路は悪しからん。

四 たとひ食盡き刀折れるとも如何でか屈すべき。若し食盡きれば砂を嚙みても進まむ。若し刀折るれば空拳を揮ひても戦はむ。

- 五 如何なる方法を用ひれども、目的だに正しければ可なりと言ひ得るか。
- 六 志いかに堅くも身體弱ければ、目的を達し得まじ。
- 七 嬉しとも笑はず、悲しとも歎かず。
- 八 馬群空しきとは馬なきといふにあらず。
- 九 成績あしとも失望するに及ばじ。
- 一〇 足疲れて行くべくともおもほえず。

演習四

次の文の誤を正し、許容されたものはことわれ。

- 一 天地も崩るばかりなり。
- 二 折々梟の聲淋しけに聞ゆのみ。
- 三 恰も機械水雷の爆發すにも似たり。
- 四 この度の戦は死ぬと生くとの境なり。
- 五 汝の行爲に對して我はあしくとも考へず。

六 甲と乙との差はいくばくなるや。
 七 田畠は既に流されて、一粒の收穫さへなくなりしに、家屋すら倒れたれば見るも氣の毒の有様なり。

八 意志さへ鞏固ならば大抵の困難にうち勝ち能ふものなり。

九 旅行なしたるも不自由はせざりし。

一〇 學博しとも徳高きとは限らず。

【参考】

甲 (15) (21) (28)

乙三 (2) (15)

丙一 (24)

丙四 (4) (15) (18) (ロ)

第四篇 品詞

第一章 品詞の名稱

一六四 語の用法が主になり、意味と形態とを加味して分類したものを品詞といふ。談話や文章の主題となる語で、事物の名をあらはすものを名詞といひ、名詞に代へて用ゐるのを代名詞といふ。之に對して談話や文章の叙述に用ゐる語で、動作存在を表すのを動詞といひ、性質状態を言ふのを形容詞といひ、叙述の用を助けるのを助動詞といふ。この三つは形態が活用するから、活用言といひ、動詞形容詞を用言といふ。用言に對して名詞代名詞を總稱して體言といふ。

次に主として用言の意味を限定して叙述の能力のない語を副詞といひ、語句文章をつなぐ語で、語それ自體に意味をもつてゐるものを接續詞といふ。副詞と接續詞とは全く用法によつて名づけたものである。

又語句をつないだり、關係を示したり、其他いろ／＼の意味を副へ、口調を整へたり、語勢を強めたりする語を助詞といふ。助詞と助動詞とは語それ自體に意味をもたない。先行の語に接して始めて

意味を生ずるのである。この外感動した時の自然の叫びや、人を呼びかけたり、應答したりする語を感動詞といふ。感動の語ではあるが語それ自体に意味をもたないものは助詞とする。これは用法上獨立を缺いてゐるからである。以上の九種を九品詞といふ。

『註 數を表す語は英語では形容詞に入れてある。國語ではその名詞性のもは名詞とし、副詞性のもは副詞として取扱ふ。』

公卿の家十六焼けたり。下を限定してゐる、副詞。

男女死ぬるもの數千人。名詞。

船飛ぶが如くにして一、二町を越えつゝ移りゆく。名詞。

第二章 名詞・代名詞

一六五 名詞の中で外國語に翻譯のできないもの、人名地名のやうなものを固有名詞といひ、自然につけられた名稱で外國語に譯することが出来るものを普通名詞といふ。固有名詞に比して普通名詞の方が用法が廣く一般的である。ずつと一般的に進んで、實質的意義の既に失せた、又は失せようとする一群の名詞がある。

君のいふ所甚だ道理なり。

「所」「こと」「故」「爲」「時」「間」「物」「程」「位」「頃」「條」「件」「前」「後」「上」「中」「下」「左」「右」「始」「後」「外」「東」「西」「南」「北」「様」「さう」は皆名詞である。關係代名詞の無い國語ではこれらの或るものは相當役立つ。用法上の特徴として、意味が廣過ぎるから上に制限する語句を置いて用ゐられる場合が多い。

花より外に知る人もなし。

一六六 轉來名詞。名詞に本來名詞と轉來名詞とがある。轉來名詞の例は、

一、動詞形容詞の連用形と終止形とから。「二十四」「二十五」「五十」參照

二、形容詞の語幹又は語幹に接尾語をつけて

あか しろ 青 黒

高み 寒さ 惜しけ 眠け

三、感動詞から

あはれを告ぐる鐘の聲諸行無常と響くなり。

一六七

名詞が一層形式化された時に代名詞ができる。「汝」といへばその指す人は誰にでも通ずるのである。僕といふのも、この語をつかふ人は太郎でも次郎でも差支がない。意味の一般に互ることを形式化といふ。しかし人間だけにつかふ。自分・對手・他人といふ稱がある。人と稱との二點で制限されてゐる。又「ここ」といつても同じこと、東京小石川でいへば、小石川のことになり、京都の叡山でいふと叡山のことになる。これも場所と稱との二點で制限されてゐる。今制限によつて代名詞を分類すると次の通である。

一六八

(括弧内のは口語)

| 指 示 代 名 詞 | | | | 人 代 名 詞 | |
|-----------------|-----------|-----------|-------------|-----------------|-----------------------|
| 向 方 | 所 場 | 物 事 | | 自 稱 | 對 稱 |
| (こ)こ ちな ら | (こ)こ こ | (こ)こ れ | 近 稱 | (わ)わ れ私 予 | (あ)な なれ な た汝 |
| (そ)そ ちな ら | (そ)そ こ | (そ)そ れ | 中 稱 | (あ)か か | (あ)か か |
| (あ)あ ちな ら | (あ)あ そ | (あ)あ れ | 遠 稱 | (あ)だ た | (あ)だ た |
| (ど)い ちつ か | (ど)い づ | (な)い づ | 不 定 稱 | (な)れ れ | (な)れ れ |

(注意) この・その・かの・あの・どのを指示代名詞とし、一語として取扱ふ。

一六九 「おの」「おのれ」も人代名詞で自稱に用ゐる、又對稱にも轉ずる。人代名詞で最も發達したのは對稱で、最も發達しないのは他稱である。人代名詞の他稱にもと語が無かつたのを、指示代名詞事物から借りて來たのである。「わ」「な」「た」「そ」一音のもの下には「が」といふ助詞がつく慣例である。

第三章 副詞・接續詞・感動詞

一七〇 【参考】 副詞ノ意義ヲ例ヲ擧ゲテ説明セヨ。乙一(12) 甲(12)

一七一 試みに次の文につき副詞・接續詞・感動詞を指摘すべし。

- 一、夙に凡兒に秀でたり。
- 二、書を読み、又文を學ぶ。
- 三、此筆は書にも宜しく、亦畫にもよろし。
- 四、多く古人の書を読む。
- 五、あゝ忠なるかな、孝なるかな。
- 六、いざ之より出立仕らむ。
- 七、あなあさましの世や。
- 八、やあやあ、汝も敵の子分か。
- 九、文を學び、或は武を研く。
- 一〇、重盛は君に忠を致し、且父に孝を竭せり。

- 一一、日本及支那は東洋の同文國なり。
- 一二、かくなり行くは天命か、はた自から招く所か。
- 一三、天下靡然として風をなす。
- 一四、いつぞや先生に聞きしことを思ひ出せり。
- 一五、まどかにめぐれよ、やよ子供。
- 一六、すは一大事とかけ出したリ。
- 一七、毎年一度船を遣さんと約束せり。
- 一八、今更、往事を悔ゆとも詮なかるべし。
- 一九、あな嬉し喜ばし。
- 二〇、嗚呼忠臣楠子の墓。

【参考】 丙一(32) 轉來の副詞について。

第四章 助詞

一七二 前の「百四十九」「百五十四」「百五十七」の表を見よ。助詞は語句の關係を示し、又語句を接続し、その他疑問禁止願望感歎等いろ／＼の意味を添へ、或は、單に口調を整へる等の用に供する語で、其語自體に意味をもたないものをいふ。

一七三 助詞をその接する上の語によつて三つに分ける。

- 第一類 名詞に接する助詞。
- 第二類 種々の語、名詞・動詞・形容詞・副詞又は他の助詞に接するもの。
- 第三類 活用言に接する助詞。

試みに「百七十一」の例題の中から助詞を指摘し、右に示した通り分けて見よ。

一七四 「に」「に」「凡兒」の「に」は副詞の語尾で助詞とちがふ。二「凡兒に」の「に」第一類で「凡兒」と下の語との關係を示す。省くことが出来ない。標準を示す。三「書にも」「畫にも」の「に」標準を示す。二と同じ助詞。その下の「も」は第二類の助詞で、上の「に」を助けてこれもこれと合す意を添へたので助詞の助詞である。一〇「君に」「父に」の「に」も標準の事物を示す。一五の

右の「が」は主語に結びついたもので、第一格を示す。活用言の名詞性の語や代名詞につく。普通の文では主格助詞を省くことが多い。又第二類の「は」を用ゐることもある。『百七十一』の例題「一〇・一一を見よ。」

君が代の初春

右の「が」は名詞と名詞とを結びつけたもので、第二格又は領格・所有格・形容詞的修飾格ともいふ。

口語に於ては「が」は専ら第一格を獨占してゐる。活用言につく場合は上に「の」を冠らせて「のが」といふ。

又次のやうな「が」の慣用が生じてゐる。

魚釣がしたい。

机に本が置いてある。

他動詞の上にあつて第四格「を」の意味に用ゐたもので、もと誤として取扱はれたが、今はその慣用が是認されてゐる。

第三類にも「が」がある。一つは接續の用をなし、一つは願望の意を添へる。

一八一の

木枯のはてはありけり海の音

右の「の」は語と語とを結びつけたもので、第二格の助詞である。上古では多く「が」を用ゐ、中古以後は「の」をつかふ。

わづかの費用 まれの細道 はじめての旅

右の「の」は副詞の語幹又は副詞に結びついたもので、上二つの例は口語では「な」といふ。やはり第二格の助詞である。

雨のふるさへをかし。

音羽の山のけさはかすめる。(コトカナの意)

右の「の」は主語に結びついたもので、第一格を示す。この場合は句の中の主語を示し、又、餘意を含むことが多い。

極古い語に「な」といふのがあつて、熟語をつくつて、僅にその面影を残してゐる。「たなごころ」(手ノ心)「みなかみ」(水ノ上)これが口語では「雨がふりさうな模様」「繪で見るやうな姿」「鮮かな空氣」「太平洋を飛ぶさうな話」と同系のものである。この口語の「な」を第二類に入れて置いた。

第二格の古い助詞に「沖つ、白波」「天つ、社」「時つ、風」の「つ」がある。古い文章を読むときに出て来る。

口語に於ては、「の」は専ら第二格を独占してゐる。口語では「が」「の」の分業が判然となつたのである。随つて第一格の用法は自然消滅で、その代り名詞の代用と語句を重ねるのと二つの用法が殖えた。

一番よいのを取らうか。名詞代用。

何のかのと小言ばかりいふ。重ねる用法。

名詞性や代名詞についた例で、第一類である。口語では第二類にも「の」がある。話の終りにつく。

「のよ」「のね」ともいふ。婦人の言葉である。

一八二

に 都に住む。

その罪は制度にあり。

心にかゝるは母人の御事、昨日(yesterday)にかはる雲るの空。

右の「に」は動作又は存在の場所や標準を示すもので、第三格の助詞である。「にも」「にて」「ので」

の意味をもつこともある。

獸に劣る 「にも」の意。

仁和の帝の皇子におはしましける時。 「にて」の意。

寂しさに宿を立ち出で眺むればいづくも同じ秋の夕暮。 「ので」の意。

一八三

副詞をつくる「に」情態を示す。又時を示す。

大聲に叫ぶ。

思の外に長びく。

遠慮なしにいふ。

毎朝六時に起床す。

右の「に」はもと助詞であつたが、名詞又は連語(連語)に結びついて副詞をつくつたのである。かうなる

一八四

叙述性の「に」 月 明かに 星稀なり。

右の「に」は形容動詞の語尾である。形容動詞の語幹に結びついて叙述の中止をあらはす。助詞の

「に」ひなす。

一八五 慣用の「に」

(一) 降りにふる 走りにはしる。

(二) 月に叢雲花に風

右の「に」は「と」のやうに同一の語を結びつけて意味を強める場合は一で、語を結びつけるのに用ゐられるのが二である。

口語に於ては次の一用法が殖えた。

鳩に雀に雲雀に鳥

ビールに煙草にマツチに葡萄酒

右の「に」は語句を重ねるものである。

文語では第三類の「に」がある。

一八六 を

書を読む。

家を離る。

右のはじめの「を」は第四格の助詞、次のは第三格の助詞である。「百七十六」を見よ。

この外文語では第二類詠歎の「を」と口調を整へる爲、語句の間に投入れる「を」がある。

八重垣つくるその八重垣を。 詠歎「よ」に似た意。

瀬を早み岩にせかるゝ谷川。 口調 間投的用法。

又第三類の「を」もある。

いそがすばぬれさらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨

一八七 と

桑田變じて海となる。

急がばまはれといふ諺あり。

人やあると問ふ。

右の「と」は上を名詞と見て受け止める助詞で、第三格で動作の標準を示す。下に視・聽・言、動・思の意味を表す動詞が來ることが多い。そのうちでも特に「言ふ」「思ふ」が多くつかはれる。「とて」を「と言つて」「と思つて」と口譯するのはこのわけである。「百五十三」を見よ。

語句を重ねる列擧の「と」については「百五十一」「百五十二」を見よ。この外に次の例に示すやう

な、「ト共ニ」の意味の第三格の助詞がある。

屈原は世と推し移ることをなさざりき。

泣く涙雨と降らなん。

花と散りゆく大和増荒雄。

右の「と」は「ノヤウニ」といふ意で、比喩を示す。これは第三格ではない。

口語では「に」と同じやうに、副詞をつくる用法と、第三類条件を表すのことがある。

どんとつきあたる。副詞の語尾

雨がふると運動會をやめる 条件

一八八 へ

右へ向け。

右の「へ」は方向を示す第三格の助詞である。

口語に於ては「に」「へ」の區別はなく、混用されてゐる。

一八九 より・から

花よりあくるみよしの朝。

明日からは若菜をつまん。

右の「より」「から」は起點を示す。但し「より」は古く場所の經由を示したものである。

箸その川より流れたり。

右の「より」は「を」の意味である。それがいつの間にか起點を示すやうになつたのである。

紅葉は二月の花より紅なり。

右は比較の標準を示す。

我より外にまた人はなからん。

右は下に打消の語が来て「限る」意をあらはす。

口語では「より」は比較にばかり用ゐられ、起點の「より」は消滅して「から」で表す。

「から」は第三類に原因理由を示すのがある。

一九〇 まで

東京より京都まで急行券を買ふ。

右は「より」と相對して用ゐられ、終點を示す。

花と見るまで雪ぞふりける。

後の世までも語り傳へん。

右は程度や範圍をあらはすものである。

一九一

にて

この本は神田の夜店にて買ひたり。

舟にて木曾川を下る。

毛筆にて鮮明に認むべし。

手術は三十分にて終らん。

右の「にて」は「に」と「て」(第三類)の合成した熟語で、「ニオイテ」「ニヨツテ」「ヲモツテ」「ニシテ」等の意を表し、場所、材料、方法、期間を示す。口語においては「で」といふ。「で」は第一類唯一の口語助詞で、他は文語・口語兼用である。

一九二

頭は牛にて身體は蛇なり。

右の「にて」は叙述性の「に」に「て」を加へたもの、「百一」を見よ。

指定の助動詞の連用形の中止用法で助詞とちがふ。又「にして」ともいひ、口語では「で」といふ。

「だ」の連用形である。「百二」を見よ。

二、第二類の助詞。

一九三

係りことば。

第二類の助詞のうち「は」「も」「ぞ」「なん」と疑問反語の「や」「か」と合せて六つを古來係詞としてゐる。但し「は」「も」を省く説もある。丙一(33)を見よ。

【参考】 丙四(2)(ロ) (9)(ニ) (10)(ロ) (12)(イ) (18)(ロ) (24)

一九四 反語の「や」「か」。丙一(30)を見よ。

一九五

禁止 な。

主なしとて春を忘るな。

主なしとて春な忘れそ。

右の通上に置くのと下へ置くのと二の用法は古くからある。「百四十二」と「百二十二」とを見よ。

一九六

だに・すら・さへ

(一)鏡を恐れて手にだに取らず

(二) 山吹の實のひとつだに無きぞ悲しき。

(三) 都だに淋しかりしを雲はれぬ吉野の奥の五月雨の頃。

(四) 聖人すら憂あり、況んや凡人に於てをや。

(五) 日も暮れたるに雨さへふり出でぬ。

「だに」の語原は「直に」である。その上の「タ」が落ちて出来たので、「ひたすら」「ひとむき」「全くそればかり」の意で、意味を強める。(一)はこの例である。純一切實に強めた意から限ぎる意に轉じたのが(二)の例である。「ダケガ」「セメテナリト」といふことである。次に類推の意「デモヤハリ」に轉じたので(三)はこの例で、軽い方を擧げて重い方を「況んや」云々と言明するのと、略して言はないのと二種ある。これはもと「すら」が上古でもつてゐた意味と全く同じい。中古で「すら」は歌でも文でもつかふことが稀で「だに」を「すら」の代りに用ゐたのである。古今集以後の歌にある「だに」は「すら」の代用で、(三)はこの例である。鎌倉以後漢文の流行につれて「すら」を再び用ゐるやうになつた。(四)はその例である。「さへ」は累加の意で「ソノ上ニ何マデモ」と譯す。「其上」の轉といふ。口語では「さへ」一つで以上の四つの意。強意・制限・類推、累加を表し、「だに」「すら」の用法は消滅した了つた。

この陣地さへ落さば他は憂ふるに足らず。丙四(4)
右の「さへ」は制限の意で「この陣地だけを」といふこと、口語の「さへ」の用法で、文語では、「だに」と訂正すべきである。

三、第三類の助詞

一九七 なん ばや

波風の靜かなる日も舟人は楫に心をゆるさざらん。

鶯は谷の古巢を出でぬともわが行方をば忘れざらん。

右の「なん」は未然形について願望「他へ向つてかうしてくれ」と誂へる意味をもつものである。よく入試にでる。

【参考】 乙一(13) 丙一(25)

心あらむ人に見せばや津の國のなにはあたりの春のけしきを

心あてにをらばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊のはな

右の「ばや」はじめのは熟語で「タイ」と自ら願望する意である。次のは「ば」と「や」と二つの

語で「折るならば、折られようか」といふ意で、「や」「む」は係結である。丙一(26)(6)

一九八 がな もがな

久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな。

我が命ながくもがなと思ひたりしを。

右の「が」は願望を表す助詞で、下に「な」(咏歎)を結びつけ、又上に過去完了の「てし」「にし」を冠して動詞に、又「も」を冠して形容詞につく。丙一(27)

第五篇 文章法

第一章 主語 述語

花 咲く。

牧童 笛 を 吹く。

父 其長男に財産を譲る。

一九九 右は語が集まつて纏まつた思想をあらはしたもので、之を文といふ。

二〇〇 文には題目となる語がある。前の例の「花」「牧童」「父」で 之を主語サブジェクトといふ。又主語について叙述してゐる語がある。之を述語プレジケートといふ。前の例の「咲く」「吹く」「譲る」は述語である。

二〇一 次の文につき主語述語を指摘せよ。

(一) ベルが鳴る。

(二) あの人は男か。

(三) 弟がボールを投げてゐる。

(四) かの犬は洋犬なりや。

(五) 猿も木から落ちるといふ諺がある。

二〇二 文章法で取扱ふ語といふのは、多くの場合は言に辭の結合したのをいふ。例へば(一)「ベル」といふ名詞に第一格助詞の「が」の結びついた語の集りを一纏めにして取扱ふ。品詞法では之を二つに分けて取扱つた。文は出来上つた家のやうなもの、品詞はその材料で木・土・金・石・瓦といふやうなものである。(二)は「男か」を一纏に(三)は「投けてゐる」(四)では「洋犬なりや」を一括して取扱ふ。つまり助動詞・助詞は名詞や活用言に結びつけて一纏にするのである。

註 言とは名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞・動詞・形容詞のことで、語それ自體意味をもつてゐるものをいひ、辭とは 助動詞助詞をいふ。これは先行の言に結びついて意味が出てくるので、その辭自體には獨立した用法意義がないのである。

第二章 修飾語

お寺のベルが、リンリンと鳴る。

二〇三 右の「お寺の」は「ベル」に添加し、「リンリンと」は「鳴る」に添加して、文の意義を精しくしたのである。修飾語とは文の意義を精しくする爲に添加する語をいふ。名詞性の語へ添加するのを形容詞的修飾語(略して形修語)といひ、活用言に添加する語を副詞的修飾語(略して副修語)といふ。主語に修飾語を加へて主部とし、述語に修飾語を加へて述部とする。文章法の入試問題の大部分は主語・述語又は主部述部を指摘することである。

二〇四 主語又は主部は口語に言つて「ガ」又は「ノガ」を結びつけて見ればわかる。「ガ」は名詞に、「ノガ」は名詞性の活用言について主語とする格助詞である。乙四(3)を見よ。

優勝旗を會長が、授與せられた。
向ふに見えるのが私の學校です。

二〇五 形修語は形容性能の語である。試みに次の文について形修語を指摘すると——をつけたのがそれである。

(一) 輝く入日いと美し。

(二) これから東が鶴舞公園です。

(三) 大層うつくしい花が咲いてゐる。

(四) 花の咲く春も追々近づいて來ました。

(五) 風の吹く夜は氣味がわるい。

右の形修語のうち(一)と(二)とは言又は言に辭の結びついたもので語である。(三)は副詞と形容詞との結合で二つの言からなつてゐる。之を連語といふ。(四)五)も名詞に助詞のついたものと動詞とからなつて、上は主語、下の動詞は述語となつてゐる。さういふのを形修句といふ。句とは主語と述語と結びついて文の形をしてゐるが、なほ大きな文の部分であるものをいふ。

花の咲く春も近づいた。

右側の線は大きな文を示し、左の線は小さい文即ち句を表したものである。連語は語と同様に取扱ひ、句だけは句といふことを明示すればよい。

二〇六 副修語は副詞性能の語である。試みに次の文について副修語を指摘すると——をつけたのがそれである。

(一) 雨 甚だ強く 降りたり。

(二) お手植の松は 勢よく 成長せり。

(三) 光陰は矢の飛ぶが如く過ぎ去りぬ。

右のうち(一)は副修連語で(二)(三)は副修句である。「勢よく」は「勢」が主語で「よく」が述語である。

第三章 客語 補語

牧童 笛を 吹く。

父 其長男に 財産を譲る。

二〇七 右の「笛を」「財産を」は他動詞の目的語で之を客語といふ。客語は第四格の助詞「を」を伴ふ。「長男に」は動作又は存在の標準を示すもので、之を補語といふ。補語には第三格の助詞が伴ふものである。「百七十九」を見よ。

註一、補語と副修語とについて學者の説が區々になつてゐる。随つて入試問題もなるべく之を避けてゐる模様である。まづ助詞で區別するがよからう。場所は副修語に入れる説もあるが、標準を示した點から補語に入れるがよい。時間は副詞になるから副修語に入れる。副詞性能の語句を副修語とし、名詞又は名詞性に第三格助詞のついたものを補語とするがよい。いづれこの二つは合一することであらうと思ふ。

註二、補語の起原は外國語でもさうであるが、「ある」「なる」「する」といふやうな形式動詞が述語になつた時に、述語の要求に基づいて生じたものである。「ある」とは「何であるか」「なる」とは「何になるか」「する」とは「何を何にするか」といふ内部の要求から出來た語である。客語も同様で「打つ」とは「何を打つか」といふ要求で、やはり内部必然の要求である。修飾語は之に反し、外部から添加したものである。け

れども外から内へ進んだものと内から外へ出て來たものと其接合點に位する場合に於て、混合するから人によつて見方を異にするのは止を得ない次第である。

二〇八 左に補語の例を示す。

- (一) 飛行機空を飛ぶ。
- (二) 父は一番汽車で東京へ行かれた。
- (三) 猿も木から落ちる。
- (四) 幼時は簡單なる遊戯に心が引かれる。
- (五) 桑田變じて海となる。

註、右の(一)(二)(三)は副修語と説いてゐる本もあるが本書は補語を廣く解し、標準を示したものととして、すべて補語としたのである。

第四章 句の種類

二〇九

名詞句

入試問題に句中の主語を示せといふのがあるから、句については十分確な知識を要する。句には名詞と同じ性能を有するものがある。之を名詞句といふ。

(イ) 海岸の清らかなる遙に須磨を凌ぐ。

(ロ) 雪は鵝毛の飛ぶが如し。

(ハ) われはあまりの楽しさに時のうつるを知らざりき。

(ニ) 流石の山陽もその詩材の敏妙なるに驚けり。

(イ) は主語となつてゐる句である。名詞は主語となる性能を有する。又名詞は(ロ)の「が」の上、(ハ)の「を」の上、(ニ)の「に」の上に来る語である。つまり名詞と同じ働きをする句であるから名詞句といふ。

形容詞句

彼は友人の住みし家を買ふ。

花咲く春は楽しきものなり。

時に風なき日もあり。

正成は類稀なる忠臣なり。

能ある鷹は爪をかくす。

右の句はいづれも名詞に係つて形容詞と同じ働をするから形容詞句といふ。

副詞句 副詞と同じ性能を有する句をいふ。

學問がさほどなくても、人物は確かです。

雨降りたれば、泥濘甚だし、

右は前提用法をなしてゐる。

御手植の松は勢よく成長せり。

將軍は意氣揚々と駿馬に跨れり。

叙述句 この外に文の叙述をなす句がある。例へば

東京は人口多し。

石炭は火力強し。

兎は耳が長し。

右の文は述語が性質情態をいふ形容性である。「東京」「石炭」「兎」が多くの屬性をもつ。その屬性を説明するのが叙述句である。「東京は日本の首府なり」といふ代りに「人口多し」といふ文が述語となつて、大きな文の叙述部分をなしたのである。

註、もと右の場合には、例へば「兎は」を總主語又は文主といひ、「耳が」を主語、「長い」を述語としてゐるので自然さういつてゐる書物もある。

二一〇 名詞句が主語となる場合は、「は」といふ助詞のあることが多い。これは大切なことである。名詞句中の主語には、「の」又は「が」をつける。

古人が、禮を重んじたは、この理なり。甲(6)

右のやうに「は」で強く示したのは「は」の上全體が主語になることを忘れてはならぬ。又「は」よりも一層強い「こそ」を用ゐることもある。この場合も「こそ」の上全體が主語になる。名詞句からなる主語である。

五常の道廢れて風俗日にくだりゆくこそ嘆かはしけれ。

句中の主 同上主

折ふしのうつくりかはるこそものごとにあはれなれ。

主

ものゝあはれは 主 敘述句 秋こそまされ 主

尤も右のやうに「こそ」は置き所を一定しない。強めたいところへ入れる。「ちよにものこそ悲しけれ」こんな風に間投的性質もある。しかし主語を示した場合に誤らぬやうにありたいものである。乙四に解説してあるのを見るがよい。

よろづの事は 主 月見るにこそ 補 慰むものなれ。

右の「」を主語と思つてはいけない。この「こそ」は補語を強めたのである。しかし。

ある人の「月ばかりおもしろきものはあらし」といひしに、又ひとり「露こそあはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。

右の文で長い「句が「こそ」によつて主語となつてゐる。「こそ」の上全體が主語である。之を誤つてはならぬ。

又「こそ」も「は」も省いて主語の下に助詞を置かないこともある。これは漢文口調の文に多い。規模の雄大にして建築の宏壯なる (コトナ) 實に天下に冠たり。

總體高師受験の士は男女とも文章法を疎にしてはならぬ。女専志願の方も心得て置くべきである。

高等學校の方も文章法を加へる傾が見えて來た。

第五章 節

二一〇

次のやうに一つの文のうち主述結合があつて、各々獨立した關係にあるのを節といふ。

月落^節ち、鳥啼^節く。(この二つの節で、一つの文となる。)

句といふのは主述結合の從屬關係の場合で、上だけをいふ。

句

雪ふれども 寒さはけしからず。

下が本體で上が下に從屬してゐる。

(一) 花咲き、鳥啼く。

(二) 兄は弟を愛し、弟は兄を敬ふ。

(三) 月落ち、鳥啼き、霜天に滿つ。

(四) 力山を抜き、氣は世を蓋ふ。

右は元來二つの文又は(三)の如きは三つの文であるのを、中止の敘述を用ゐて一文に連ねたものである。それ故に別々に終止形にすると二つ又は三つの文となる。

一、花咲く。鳥啼く。

二、兄は弟を愛す。弟は兄を敬ふ。

三、月落つ。鳥啼く。霜天に滿つ。

四、力山を抜く。氣は世を蓋ふ。

節が句になることもある。

花咲き、鳥啼く春の空はいとのどかなり。

徳高く、行善き人は世に敬せらる。

右は節からなる形容詞句の例である。「花咲き」と「鳥啼く」とは各々獨立してゐる點は節であるが合して、「春」との関係からいふと、獨立し得ないで、春に從屬してゐる。

兄の弟を愛し、弟の兄を敬ふは友悌の道なり。

春過ぎ、夏來り、秋去り、冬至るは天地の常數なり。

右は節からなる名詞句の例である。

次の文につき節又は句を指示し、句には種類をも述べよ。

一、花の散るは蝶の舞ふに似たり。

二、紫苑も咲いて居れば女郎花も咲いてゐる。

三、雪ふれば木毎に花ぞ咲きにける。

四、都大路も八重葎しけれる野邊とぞなりにける。

五、飾の褥と思つたのは紅葉の散つてゐるのであつた。

第六章 文の構成上の種類

二二二 節をもつてゐる文を重文ちゆうぶんといひ、句を含める文を複文ふくぶんといひ、句も節もたないのを單文といふ。

我主も人も主 賛成述せり。

農夫主は 耕作し收穫し租税を納む。

右のやうに主語が二つあらうが、又述語が三つあらうが、主語と述語との結合が一回であるのを單文といふ。

雀を捕ふる鷹も、獵師に射落さる。

父は晝を書きたる本を、子に與ふ。

牛に騎れる小兒あり。

親に似ぬ子は、鬼子なり。

右の例は客語補語について敘述せる活用言「捕ふる」「書きたる」「騎れる」「似ぬ」をもつてゐる。しかし主語なり補語なりが下に來て形容性の働をしてゐる。そこで全體が形修語で句でないからやは

り單文である。

二二三 下に來た場合と全然省略した場合とは區別せねばならぬ。

身體が大事だといつもいはれてゐる。

花の散る夕方を好む。

右は全體の主語を省略してゐる。これは補つて複文として取扱ふ。

入試問題に單文複文重文を指摘することが出てゐる。試みに甲(一)を見よ。

彼はいつもとは相手の様子が違つてゐることに氣附いた。

右は 彼は……………氣附いた。

これは大きな主語述語の結合である。どういふことに

いつもとは相手の様子が違つてゐる(形修句)

かういふことに氣附いた。——のうちに小さい主語述語の結合がある。

二二四 左の文を文章上より解剖し、構成上の種類を示せ。

一、春は花をめで、秋は紅葉をあはれむ。

二、去る者は追はず、來る者は拒まず。